十二月号



BANSYO



枯れに向き重き辞書繰る言葉は花

細

見

綾

子

という中七のため解釈は膨らむが、辞書で「花」のう言葉自体に向き合っているのか、「重き辞書繰る」り、枯野が広がっているのか、それとも「枯れ」といり、枯野が広がっているのか、それとも「枯れ」とい

この句の眼目となるのは「言葉は花」であり、項目を探しているというだけの句では決してない。

たが、それは道具としての大切さや美しさという感言葉の大切さや美しさは知っているつもりでい最初の「枯れ」と最後の「花」との対比である

のは、この作者だけなのかもしれない。く新鮮に感じられた。このような捉え方が出来る

覚といえる。「言葉は花」という下五には理屈が無

(沢辺たけし)



BANSYO

まっついげ こころよき疲れなるかな

仕事を したる

日川家k仕事をしたる後のこの疲れ

石川啄木(『一握の砂』より)

万 象

	特別作品評(十月号)	同ノ牛房作品	司人寺川乍品	同人作品の佳句 :	珈琲ぶれいく(5) :		同人会だより	同人作品	万象の窓③ 季語につい	風音散歩② (十二月号)	風音集I・	主宰作品か	名誉主宰作品
ā)	生 身 魂 宮西 修一	馬鈴薯の花 大村かし子			10月の「万象」オンライン同人句会高点句	第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集 ‥‥ 沢辺たけし	江見悦子 選	ついて 1 江見 悦子	8) 小林 愛子	■	つぽれ 江見 悦子	の 実 内海 良太
:	38	37	36	34	33		32	12	11	10	6	5	4

〈表紙イラスト〉 永井もりいち

$X \cap X \cap$

退 山 灯 凞 新 雷 流 を 0 木 涼 門 屈 消 実 過 0 に な に を 相 力 て 病 吹 香 擊 7 ょ 抜 < ŋ 院 Ш ち ŋ 息 ŧ 0 門 合 漂 0 足 た 病 B ひ ら 窓 ふ 室 る 秋 7 ず 夜 鳥 生 筑 と 出 入 の 渡 姜 波 な 水 院 長 山 市 Ш る る す

内海良太

瓢

幇 ž 離 注 秋 ゃ ŋ る 間 分 は 連 病 ぎ る 0 0 5 わ ŋ 0 b 明 締 か す た 添 ビ 話 H < め す ル は ま 裂 煉 る 0) か H 足 b 瓦 巡 さ 朝 つ 場 通 5 を ほ 新 顔 本 ŋ は n な 0 曼 酒 た や 秋 風 紺 珠 ع 酌 秋 深 来 0 沙 落 華 祭 朝 む る つ

かつぽれ

江 見 悦 た

焼

の

た

ح

は

ひ

ら

が

な

小

鳥

来

る

葬

の

後

抓

ţ

は

シ

ヤ

イ

ン

マ

ス

力

ッ

ŀ

色

草

の

活

け

あ

る

深

き

眠

ŋ

か

な

名

月

白 萩

小 窓

開 か

ば

ゃ

小

林

振 車 森 ŋ 売 0 向 る 端 け は に ば な 日 闇 し は た 白 ま 衰 萩 ŋ ح く て ほ る 遠 れ 葡 き 咲 萄

き

嬋

棚

秋 の 雨

雲

追

ひ

て

Ø

Z

新

涼

の

ス

Ξ

1

力

Ì

ほ

が

ら

か

12

雲

か

が

ょ

ふ

ર્ક

良

夜

な

る

中 村

(編集人)

澤

宗

問正

柳

帰 燕 **の** 空

外 晴 れ 堀 渡 0 ŋ 垣 帰 に 燕

天 な 0

ŋ

17

ŋ

萩

の

花

下 麩 ピ 羅 7 を 添 1 弾 ~ く て 湖 空 人 だ 朴 畔 ح る な な 0 る

た ひ の と 声 つ 絶 本 え 屋 L つ 故 نتح 郷 n 小 7 鳥 秋

5

来

る

深

む

せ 顔し 問ぎ

蓮 の 骨

戦

0 H 吊 演 楯 習 渡 砲 ŋ 0

響

く

街

産

Þ 車 ビ み ル 7 に ゐ 網 た 掛 る 蓮

湯 0) 白 底 き に ے ろ ح ろ 柚 子 H 0 n

(同人会会長)

曾

根

7

仏 秋

弟

木

0

栗

13

猿

が

来

7

ゐ

る

外

厠

灯

台

空

に

舞

፠

放

生

0)

白

ž

鳩

す

つ

新

畳

匂

ኤ

方

丈

秋

彼

岸

不

忍

ネ

パ

1

ル

0

赤

子

の

黒

目

星

涼

L

初

霜

受

付

に

貝

0

風

鈴

海

0

家

開

貝

の

風

鈴

福

島

身

に入むや塩田能登の災禍を思ひて

句

碑

0)

如

何

13

如

何

に

子

闇

来

て

虫

聞

く

耳

と

な

ŋ

ゐ

た

ŋ

ま

新

米

ほ

の

甘

L

卵

か

け

て

み

む

地

L

秋

驟

雨

走

ŋ

蕎

麦

小

窓

ょ

ŋ

7

ょ

61

と

手

0)

出

て

秋

0

雨

0

L

ま

ひ

忘

n

L

秋

簾

冬

至

子

12 池 の ŋ

ح

13

年 を 惜 み

け 土 煤 0) 蔕 払 骨

∽∞∞ 風音集Ⅱ

灯

台

^

花

野

0

千

草

踏

み

憨

ઢ

鬼

の

子

の

ょ

ŋ

ŋ

出

せ

ŋ

宵

闇

Þ

白

樺

そ

ぞ

ろ

散

ŋ

花 野 の 千 草

松 原 智

(北海道)

捨

案

山

子

始 む

獺

祭 忌 子 蓑 供 野 半 球 身 の 乗 ゃ

じ

楽

L

沢 辺

た

子け 楽し

終 秋 夕 の 焼 家 海 石 鳴 垣 ŋ 止 覆 ま ኤ ぬ 萩 石 に 狩 浜 雨

墓

仕

舞

ひ

急

が

る

墓

地

0

末

枯

る

る

鉈

彫

0

不

動

明

王

ક

み

ぢ

燃

Ø

捨

案

山

子

夜

空

に

手

足

伸

1.

け

ŋ

玉

入

n

の

数

ኤ

る

声

ゃ

天

高

田 ゃ

亀

寒

露

栃す *子

新

米

吉

中 _東愛

京子

山 た 花茎 本 る 塊 ゃ 立 小 清 7 秋 蟹 5 ŋ 0 か か け 風 な 12 ŋ

猪

O

鼻

で

ま

さ

۷"

る

土

手

0

草

布

新

米

が

さ

5

さ

6

ح

鳥

声

0

11

つ

0

間

12

消

ゆ

寒

露

か

な

蜘

脚

袋能蛛

より場るの囲

楷

0

木

に

丸

太

の

支

柱

小

鳥

来

る

雨

に

伏すジ

ンジ

ヤ

1

マ シ

ユ

マ

口

の

ゃ

う

な

毒茸

眩

1

め

ŋ

枯

蓮

を

登

ŋ

つ

め

隣

^

0

道

に

増

え

た

ŋ

曼

珠

沙

菙

稲

架

組

L

で

丹

沢

駅

頭

の

大

樹

す

つ

ぽ

ŋ

椋

統

تتر

る

ほ

秋

夕

焼

土

手

走

ŋ

込

む

弓

道

部

石

源

流

ま

で

あ

ح

ひ

と息

ゃ

木

の

実

降

る

月

の

闇

微

熱

の

指

を

b

て

あ

ま

す

雨

音

を

聞

く

鬼

灯

を

杉

み

な

が

5

新

涼

ゃ

水

か

げ

ろ

ኤ

が

橋

揺

し

赤 ح

ん

ぼ

大

61

な

る

月

を真

上に

ジ

ヤ

ン

グ

ル

ジ

ム

関

ケ

原

其

処

此

処

風

の

曼

珠

沙

華

榎

本 文

第代

虫

の

夜

井 村

则子

千 身 つ なぐ手 生 籠 ŋ ŋ の の を 隊 膝 風 列 を 0) 抜 な 揃 け し ^ ゆ て て く 下 良 赤 ŋ 夜 とん た か ほ ŋ な

父

母

在

さ

ぬ

生

家

ゃ

遠

し

色

葉

散

る

む

b

ぎ

b

0)

心

V

ざ

ょ

ኤ

史

0)

夜

細

入

村

女

ば

か

ŋ

0)

晚

稲

刈

乗

ŋ

换

0)

駅

K

尼

僧

Þ

秋

桜

寝

ね

が

て

に

١

口

ኤ

ふ

む

生

姜

酒

田 美

神

新

涼

静穂 岡子

> 微 熱 の 指

前 田 貴

沖美 想子

看 手 護 鏡 師 を の ぬ 真 ζ" 夜 ፠ の さ 病 さ 衣 ゃ ゃ き 雨 遠 の 稲 月 妻

ど 榴 き 0) た 実 るて 割 れ ኤ て てふ ĺЦ 止 結 め び 0 草 絆 は 実 創 に 膏

- 9



(音散歩 ② (土)月号) 小林愛子



案 Щ 子 夜 空に 手 足 伸 し け ij 沢 辺 た け し

かけ倒しの人を罵しるのに案山子といった。案山子の語源は臭いものを「嗅がす」からだという。また見たせ音をたてたり、臭いものを焼いて嗅がしたりして脅した。農神でもある。竹や藁で人の形を作り、一本足で田の中へ立農神子は農作物の鳥獣害を避ける手段であり、その一つは案山子は農作物の鳥獣害を避ける手段であり、その一つは

で、作者はそんなところに愛着を感じている。そそられる。あまり役に立つとは思えぬところがユーモラスされている。捨案山子である。「手足伸し」に思わず哀歓を掲句は役目を終えた案山子が畦であろうか、仰向けに寝か

へ花野の千草踏み惑ふ 松原智津子

ち

屈託のない声で飛びまわっている。

灯

台

楽しそうだ。硬質の灯台と柔らかな千草との対照が美しい。野原一面に花やかな光景が出現する。「千草踏み惑ふ」のも竜胆、刈茅、松虫草と一つ一つはつつましやかな花が多いが、葛、撫子、女郎花など秋の七草をはじめ、吾亦紅、赤のままき乱れる秋の千草の野を思い浮かべる。その花は、萩、尾花、とたんに青い海と空を背景に、秋晴れのもと一面に美しく咲やかな反面寂しさも添う。灯台の見える「花野」と聞けば、「花野」は秋の草花が様様に咲き乱れた野原である。はな「花野」は秋の草花が様様に咲き乱れた野原である。はな

千生りの隊列なして下りたり 一榎 本 文 代

なのだ。その感慨は「下りたり」と大きな息にある。に出たに違いない。同じ形にかたまっているのは強烈な迫力作者は、သ棚を見上げたとたん思わず「隊列なして」と口いる。成熟したものは水に浸して果肉を出し酒器や器に。くて数多く群がり生るもの、豊臣秀吉の馬印として知られて「千生り」は「青瓢」の副季語で千生り瓢箪。果実が小さ

楷の木に丸太の支柱小鳥来る 亀田やす子

楷の木といったら先ず頭に浮かぶのは足利学校、

日本最古

おかしくも物悲しい。そんなある日山から降りてきた小鳥たや、つっかい柱の世話になっている。楷の木に丸太ん棒とはある。このウルシ科の落葉高木も長年の風雪に堪え難く、今敷地内に、孔子の墓の楷樹の種を育てたという大きな楷樹がの学校として知られ、大正15年国の史跡に指定された。現在

けは薄らぎ、一団はシルエットとなりつつ遠ざかる、秋もよっているではないか。先ほどから天を淡く覆っていた秋夕焼道部員といい女性であるらしい。「走り込む」姿に気合が入目の前の土手を若い一団が走っている、なんでも部活の弓秋 夕 焼 土 手 走 り 込 む 弓 道 部 一神 田 美穂 子

うやく深まってきた。「弓道部」の措辞がよかった。

季語について 1

江 見 悦 子

先ず表記の確認を

ここでは基本的なことをお伝えしたいと思います。 選句の際も、 季語が旬の中で生かされているかどうかが、先ず気になります。

俳句の約束事としての季語について、考えてみます。

ロウインなども、季語の仲間入りをしています。

れるのが基本です。生活が西洋化して外来語が増えるにつれ、バレンタインデー、パプリカ、 バラではなく「薔薇」、ススキではなく「芒・薄」です。片仮名表記は、外来語の場合に限ら

季語を作り替えない 辞書と歳時記の表記の違い

辞書と歳時記では送り仮名や漢字表記が異なることがあります。確かめましょう。 |冬晴れ||と「冬晴」、「凍て鶴」と「凍鶴」、「祭り」と「祭」等等。

植物の季語の場合

はなく「白シャツ・夏シャツ」等。行事の季語「山開き」は「山開く」とはなりません。

初の蝶ではなく「初蝶」、名残雪ではなく「忘れ雪」、桜薬ではなく「桜薬ふる」、Tシャツで

音数に合わせようと無理に縮めたり伸ばしたりせず、歳時記で確認する事が大切です。

ざ「葛の花」が季語として立項されたのだと思います。 の花」という季語もあります。根を料理に使った葛の場合、花は珍重されなかったので、わざわ 昔から花が愛でられていた「梅」と言えば梅の花、「桜」と言えば桜の花を指す訳ですが、「葛

歳時記の解説や考証を読むと、 昔から身近な木として親しまれてきたので、花と実を立項させているのでしょう。 「烏瓜の花」夏、「烏瓜」秋 は花と実の両方が目立つのですね。「桐の花」夏、「桐の実」 かつて角川源義が「俳句は日本人の生活百科」と言った意味がよ 秋は、

くわかります。次号に続きます。

- 11 -

秋

の

風

B

の

斑

を

散

す

遊

歩

道

濵

和

代

同人作

池

に

来

て水

を素

通

ŋ

鬼

や

ん

ま



水

秋

風

裡

は

る

に

れ

の

瘤

仏

め

<

色 中

褪せ

L

オラン

ダ木靴

に小鳥来

る か

迎

畑

の

空

を

61

く

筋

કૃ

札

帨

林

陽

子

世 引

の 草

写 紅

本 の

の 弧

マ 自

IJ

ア 気

青 まま

さや

由

な

る

見 悦 子 選

る

に

. の

間

に

透

の

江

は 别 新 溝 暮 虫 \equiv 太 薄 むらさき濃きむらさきも紫苑の れ の れ 盆 ŧ 萩 階 てな ے 蚊 の 根 に ゃ れ ゑ の 妹 を 届 楯 空き家 ほ に 好 四 狭 Z の 藻 ţ 方 珈 梯 袂 岩 ば 色 K 琲 山 子 の か あ 伸 淹 に 帨 水 くる秋 ŋ に ŋ n L 確 の里 あ 牽 落 木 に 花 ع か 牛 下 け 薄 鰯 の 合 空 道 花 夜 ŋ 雲 ŋ 荷 闇 裕

子

札 帨 岡 本 敬 子

- 12 -

夕 物 剝 夕 思 製 波 さ ኤ の に n あ 貌 Þ 隠 は に る 低 ひ 12 き る に ら 木 砂 髙 ま の ž 洲 n 実 の や う 落 実 虫 す つ 玫 5 の る 瑰 声 寒

娛 大 内 和 憲

木 か

0

開

羅 ひ

た

ぶ

の

新

走

ŋ け

ع て

とり 漢

が の

言へ し

ば

皆

なら 実

ぶ な

早 早 ح 在 庫 の 山 ゃ 今 年 米

栗

鼠

有

限

団 栗 を 踏 し 残 響 原 生 林

の 勲 札 幌 章 敬 大 老 内 H キ 子

闌

児

等

の

紙

花

街

ح

知

n

る

IJ

建

ゃ

色

来

炊 沼 秀 に き 吉 日 ے b が ほ か ころ す を 郷 げ る 落 秋 美 ち 男 の たり紅 香 ゃ 菊 茸 人 葉 飯 山 形

夜 遠 ŧ 他 国 の 子 守 唄

星

月

ゃ IZ 泥 翅 ょ を ŋ 休 出 づ む る る 葉 中 は 鼓 銀 橋 に 弘

の

日

ح

h

開 赤 秋

拓

史

刻

せ

石

碑

12

茜

残

業 勝

の

十

晴

れ

起

き出

it

ŋ

閨

O)

月

朝 教 室 風 に 金 髪 ち 5 ほ 5

緑

蔭

ゃ

キ

ャ

ij

1

ケ

1

ス

13

腰

か

H

て

子

休

暇

明

け

ゃ の 豇 匹 命 豆 跳 満 の ぬ 蔓 つ る の る 木 L ゃ 陰 ど 望 ゃ H の 鱗 な 雲 月 ž

な 沙 か 布 ま 0) ど ガ 頂 ス の の 実 中 の ょ は ŋ ゃ 佐 牛 苗 ば の t 声

江

別

真 ん 酒 昼 ど 酌 ん 大 t ع 口 踊 楯 開 の くる 桁 櫓 た 組 솜 た み **〈** 7 上 秋 サ 出 げ 1 水 7 口

地 秋 な 納

žΪ. 田

佳

美

してショパンを聴 ブ 肩 国 網 ラ 車 道 引 イ 沿 0) ŧ ひ 子 ۴ の 0 両 越 蕃 手 麦 天 挙 稲 **〈**" 花 光

遠 里

花 祭

火

大

哲

に 手 木 12 槿 子 0) 等 幌 無 の 北 垢 秋 の 0 浦 森 白 詩

実 霊

習

帳

手

に

園

の

縁

- 13 -

空 ま け 秋 婚 才 明 十 ま 爪 畦 竹 窓 塩 ひ 日 立 蟬 箒 を 飴 約 ع ク た さ 天 六 ん 踏 す でよいことなら明 ち の ラ の 飛 夜 ま の 打 を の め て 成 ぢ の 土 柄 つ 舐 h 秋 Þ る 破 ば 劋 ま の 実 を ŋ で 窓 蚊 に め 肩 砕 き 波 継 て 畦 種 み 蝗 蜻 あ て に 盛 た せ 立 ぎ 小 n お 用 手 癒 の H る る 蛉 足 て 意 ほ と な L 梨を を 新 の せ 多 放 札 新 気 南魚沼 ひ る 新 し 家 て 置 脚 日に 米 ŋ き つ -7-な < 鸖 涠 た 目 て 待 寄 攫 < 取 夜 今 路 の 蜘 浴 の る < 今日 森 光 ·3 髙 み 髙 娘 年 お 蛛 n の 地 稲 ひ 衣 ŋ 錦 あ 岡 暑 か の ゐ 仏 払 易 か を か か の の 山 橋 き さ 波 な 奥 月 ⟨* ኤ ŋ ŋ て 飯 な 鯉 な 松 暁 ひ 13 子 湖 風 ろ 0 О う 秋 稲 連 身 初 耳 夕 下 筑 稲 指 無 S 蓮 明 す に入むやガレ H 花 秋 波 の 澄 妻 13 さ 刈 先 校 日 L 初 果をとろ 実 うすと里 晴 ゃ 掌 ŋ の の る む の 児 の を む れ 真 の や 少 ゃ 直 の 食 る 残 の 男 夜 め 雲 空 後 Ŧī. 櫓 農 L 体 暑 鼻 の の りと煮 着 ば ゆ ょ に 百 田 夫 強 山 の明 屋 暮 を 唄 ゃ た ŋ 来 羅 風 Ł の 張 駅 さ か 色 根 扇 か 聞 宇都宮 晴 Ý る る 碧 の な やち 漢 つむ し な りに ゃ 打 ij 木 く" れ ゆ ŧ る き 地 生. ゃ 今 ゃ つ 稲 綾子の ちろ 史 甘 九 象 包 刈 朝 大 上 震 阿 れ 山 雨 虫 む を さ 月 まれ の か た 田 上 の 時 久 収 俄 の 村 鳴 か か 圌 湖 な 耳 音 る 道 る 秋 忌 な な て 雨 雨 声 津

秋

髙

し

鉈

音

髙

ŧ

墳

山

野

分

過

ぐ 北

斗

の

星

を

数

た

る

佳

子

子

勝利

名 桐 月 葉 産 土 神 0 静 寂 か な

ゃ 夫 の 遺 影 を 窓 に 向 け

ŋ 吊 佐 す 野 秋 社 増 か \mathbf{H} な 幸

子

斎

田室

の協

青

川

る

猫

ゃ

野

分

晴

秋 澄 窓 む‡の 遊 締 め 疏_眺 は 水河 を 蒟 まも 蒻 る づ た < つきか な る な

佐 野 加 藤 季

代

白 月 ゃ を 街 過 路 n 樹 る に 雲 揺 猫 れ の 爪 真 を 珠 研 ζ" 色

望

月

月

祭

る

庭

の

花

花

ع

ŋ

ま

ぜ

て

雲 か 迫 に ŋ 粧 て ኤ 来 ت る ح 闍 ŧ 夜 毒 か 茸 な

野

分

H

0)

落

ち

7

Ш

風

に

曼

珠

沙

華

落 笹 地 能 爽

鮎 舟

0

竹

籫

12

き

Ġ

ŋ

ŋ

出

づ

艷

B

佐

Ŧf

阿

澄

ŋ

ŧ

小

坊

主

を

連

n

棚

経

僧

家

13

新

盆

あ 湯

名 露 野 つ む 月 天 分

ゃ

猫

の

朝 牧 城 風 野

を

窓

13

湻

は

せ

て

路

地

住

ま

0

鍬

使

ኤ

頰

を

掠

む

る

赤

ح

ん

II

牛

の

水

飲

む

桶 ŧ

13 ゃ

月 蟬

ゆ

る

跡

0

堀

0

深

ζ"

n

鈴

0)

音

ぴ

ん ŋ

ح

立

0

猫

O

耳

球

児

0 に

帰

仕

度

ゃ

稲

光

赤 渡 良 瀬 Ш の 岩 し ろ じ 佐 ろ 野 ح 秋 芝 は 宮 ľ め

留

美

子

ح る Ø W 端 ız 井 ŀ 0 に 口 夕 ッ 絡 暮 コ t 列 早 朝 車 に 顏 纏 花 紅 ひ 縮 清 つ 砂 < L

藍 墨 色 0 佐 野 雲 分 島 け 田 て 和

枝

小 庭 つ

望

月

ゃ 虫 面 鳴 師 か < O) Þ 昼 天 風 寝 地 吹 を 返 ŧ さら ぬ し < の す 足 斞 る 元 厨 座 に 窓 敷

の 行 方 見 む る 夏 の 果

野 躍

Vi. 0 夕 売 明 野 ŋ

ح に 雲 色 押 な ŧ 上 風 ۲, ح る 我 男 体 山 人

名 を 呼 佐 ぶ 野 吉 店 ŧ 網 n

洋 子

緑

辿 ŋ た る 玉 庁 跡 ゃ 秋 H ŧ ŧ 傘

夕

映えや

中州

にそよぐねこじやら

粒

花

托

に

残

る

蓮

の

実

山

右

近

う 秋 木 す 蟬 簡 暗 ゃ の ŧ 竹 出 杉 林 土 抜 の 0 参 ζ 跡 道 る Þ 草 風 赤 ひ ぬ ば る ŋ ž

足 利 大

に の 余 Щ る 並 古 遙 地 か 図 早 ゃ 稲 風 を 농 刈 ゃ か

白

山

畳

曲 石 水 瓦 の 査 Z 宴 城 下 遺 構 町 小 鳥 澄 来 め る ŋ

飛 行 機 雲 忽 ち ኤ ゃ け 豊 の 秋

照

土

浦

澤

枝

0

波 鐘

な

て渚 る

わ

た

釆

茂

雲

抜きてに

よっ

ほ

と秋の

近江

富 本

芝 豆

ガ 殺 ラ さ ス n て 拍 手 を

器 の 彩になじみて新 もら ኤ 村

> 腐 居 士

鳥うるは K 果 つる し 秋 柿 0) 日 夕 和

Ξ 好 ほ る

所

沢

0) 子 虹 忌 立 ゃ つや 雨 朝 粒 刊 光 بح る りに 吾 出 亦 7 紅

落ちてなほ 咲 ζ 大 ジー Œ. 通 と鳴く草む ŋ を 人 Ġ 力 に 車

5 沢 か 南 紅 芙

所

畑

の

すみ

秋

分 架

の

日 列 瓜

花

を

ょ

る

鬼

薊

ょ

け

7

回

覧 の

板

来

る

去 て 山

ぬ

燕 K

観

音

像

の

空 ኤ

<

ん

で 合

撞

く

鐘

の

音

夏 低

花

麦

0

畑 街 田

広 道 0 \mathbf{H}

広 あ ኤ 13

ع

裹 く

せ

せらぎの

径に

紅

百

ゃ

渓

谷

に

沿

ኤ 違

九

十

九 の 果

折

加

須

茂

弘

子

稲 新

川 涼

棚 0

ち る

> 13 ኤ

ゃ

下

仁

買

百

B

紅

黒 菼 真

米 線

の Ø

に 0)

官

衙

跡

朝 蟬 木 秋 綾

夕

H

ざし

ゃ

は

葛

原

盛

ŋ

上

ŋ

た

る

伽

跡

樥

垣 稲

の

糸

傷

深 藍

秀

子

葉づるななかまど 鴉 玉 親 武 鳴 蒟 甲 子 蒻 山 猿 <

H の 垣 12 泳 げ Ŧ 葉 る 蛇 \blacksquare 0) 中 衣 道 江 0 秋 ビ 朝 な タ 日 す ミ まだ ン び の 刺 届 瓶 12 か のころ 注 ぬ 意と書き添 森 Þ がる つ く 秋 つ 暑 < ኤ か る な

葬 盆 塵 刃に触れ のごとき小 送 波 ゃ ゃ 白 てぱりと裂 露 夜 の に 虫 空 た 捉 の けたる西 ኤ た すきと る ţ 百合 海 一瓜か の IJ の な ŋ 家 薒

名 月 出 づ る 鹿 野 Ш

中

秋

の

新 秋 楯 暑 Ø 句 鳥 会 居 に に 集 長 ኤ ŧ 秋 蟻 う ら の 6 列

長き夜 寒 暖 差 の 小 「秋のさきやき」 さく 林 檎 の 小 振 ピアノ ŋ な る 曲

青 뽄 活 け 7 賓 客 迎 た ŋ

Ŧ

葉

喜

多

恭

仁

子

藪

呷

廻

ゃ

紫

苑

13

風

の

お

び

た

だ

L

佐

倉

潕

保

子

中 印 秋 傳 の ゃ 形 月 見 餠 0) 並 財 ぶ 布 中 敬 華 老 街 Н

恙 赤 ح 無 ん < 13 術 ハ 後 チ 公 年 前 ح の ろ 雑 ろ 踏 汁 13

菜 大 月 玲 子

> 水 筑

神

の

株

を

波

嶺

の

う

4

ただいま」と「お帰り」の声

秋

澄

める

浦 陵 保

晚

田

の

神

の

み

ぎにひだ

りに

稲穂

揺

n

下

コ ス

Ŧ

スの揺

る

n

ば

風の見えて

来

濹

竹

里

晚

松

秋 秋 ゃ ゃ 歯 東 抜 13 け 筑 城 波 西 i: 12 風 富 荒 士 نتح

若 11 つ せ か 6 61 に 琵 琶 開 湖 < 周 ゃ 航 懸 () 崖 菊 わ の 雲 百

農 家 蚊 み 腍 な る 出 疱 払 瘡 つてを 神 の 祠 ŋ 在 ょ 祭 ŋ

の 吉 に 日 暮 0) 早 く な ŋ

Ł 嬉 く ક あ ŋ 敬 老 日

侘 蜩

く

Ġ 残 b お b て 佐 倉 て 刈 も豊 大 田 か 内 の な 秋 佐 奈 枝

杜 llX を ŋ 7 歓 声 学 校 田

- 17 -

ゴ ル フ 場 渦 る 村 道 昼 の 虫

蛇 口 ょ n 水 の ぬ る さ ょ 花 カ ン ナ

佐 倉 屋 英

俊

島 息

0)

ゆ

る

き

桑

秋 残 る 蟬 蟬 0) 今 神 際 樹 の に 意 す 地 が を る 鳴 絞 ŧ ŋ 鳴 H き ŋ

笜

を

覚

ż

少

女

の

夏

終

る

成 身 に 田 し 線 む つ ゃ ぎ b の う 駅 Щ ま 為 で さ 虫 ぬ の 力 闇 瘤

倉 横 Ш 良 子

草 蒼 0) 天 花 の 子 上 規 B 総 通 下 ひ 総 し 豊 成 の 田 道 秋

バ エ ス ン ۴ 停 口 の 1 列 ル を 飛 乱 ば す ゃ て 7, 帰 な る 秋 る の 幕 び

奥 太

粛

庭

K

遊

ぶ

児

の

無

₹

秋

 \mathbf{H}

仕

舞

ഗ

煙

棚

引

く

里

の 暑

ず

ح

言

ひ

通 置 _

ŋ

雨

║

田

の

藁

の

匂

ひ

H

ŋ

秋

Н

和

解

体

予

定

貼

る

卆

き

物 匹

ح ક્રે

な 掬

Þ 金

秋 魚

の 餇 暮 か

風 ኤ n な 式

部

Ø

実

成

田

み

ち

て

፠

道

標

蠅

殼

重

な

ŋ

雅

風 の

禍

折

n

し 合

枝 ひ

浮

<

神

の

池

唄 絶 ż 玉 虫 調 色 ベ を ゃ 失 仏 は 木 花 ず

翠

雲

ヤ 投 の ピ 槍 に 秋 風 生 n け ŋ

ケ の ッ 深 に ŧ 溺 轍 れ ゃ Ш 黄 川 金 田 下 虫 原 良

汲 キ 遠

み

置 タ

ŧ

の ラ

バ 1

H ゃ 俳 句 ま だ か ح 聞 か n て b

江

猛

暑

台

く

空 風 柿 来 Þ 音 頭 な 上 の V つ ij か の 我 音 の 髙 そ < ば

の 残 空 n 仁 る 王 枝 の 立 先 ち

青 秋

長

月

て 吹 か 赤 n を 堀 ŋ

洋 子

椋 跳 ぬ の 若 る き 実 甘 か ŋ ŧ

蔭 に ع ひ 飛 久 ح ؿٙ 時 保 榊 を 垣

朝 秋 神 台

顏 の 0

0

棚

の

H

蝶 庭

淑 子

- 18 -

0 東 に 黒 雲 据 う る 秋 空

始 発 バ ス は 同 じ 顔 ؿ れ 秋 の 朝

秋 青 木 の 賊 夜 に ゃ 囲 ま 卓 れ 球 て の ゐ る 音 花 響 屋 く か な 家

船 片 帆

賀

沼

を

流

る

る

雲

ゃ

去

< ん ま み 水 Ш 輪 音 に 秘 水 め 輪 重 固 ね た 殻 ŋ

鬼 鬼

る

L

き

爽 朝 盆 手

病

む

夫

の

静

か

な

寝

息

良

夜

か

な

代

ゃ

Ш 山 0) 頂 子と に 吹 な か ŋ る て蔓 る 人 引 の < 顔 通 さ 草 採 ゃ か ŋ

船 楯 宫 本 加 津 代

野

盆

秋

の

蝶

師

存

問

の

便

ŋ

書

く

末

枯

に

光

集

む

B

暮

ど

ŧ

稲 群 秋 ŋ 妻 茗 て 0 荷 語 斬 育 ŋ ŋ み あ 裂 ኤ ゐ < さ た 闍 ま る ゃ 曼 夜 町 珠 眠 沙 の る 華 雨

船 楯 中 嶋 久

登

新

米

を

炊

bi

て

退

院

祝

は

る

る

木

洩

n

日

の

変 落 の て 谷 途 切 脱 n ぬ 帽 色 秋 ゃ Н 濃 H 花

吾 滑 色

亦

紅

江

戸

里

の

里

塚

日

冬 潮 風 瓜 に 0 紫 四 紺 等 ح な n る 通 草

分 を あ 柏 ん か 本 け か に な

東 Þ Н 風 さ か ゃ す Þ 鳩 空 方 の ع 飛 照 び 間 ŋ 込 の 合 む 大 ኤ 師 螢 輌 堂 草 車

の 過 花 ぎ を の 摘 畳 ん 酢 で 水 戻 で n 拭 ŋ き 綾 あ 子 0 く゛ 田 忌 る 郁

万 開 弁 物 H 天 を 放 に 洗 つ ど ひ 座 h 敷 出 と 二 し 0 た 隅 俵 る 0) 0) 今 秋 今 B 暑 年 の か 米 月 な

0

低 ŧ を ぬ う 7 古 秋 の Ш 蝶 京

子

台 夜 潦 病 の更 風 室 は 過 H ع 空 な て 絡 を 12 の み 大 占 に 月 ŧ か か 影 ક < 5 野 ţ 白 駐 秋 鳥 涼 思 車 た 新 か ち な 場 た

ぬ 燕 < 江

- 19 -

0 0 制 大 有 厚 仕 卷 神 夜 夜 マ 風 鯨 あ 魚 ŋ 舞 ル 尺 か 棲 服 樟 底 さ 主 身 の の 橋 無 0) ま 屋 れ メ に 13 の の が は 目 秋 て を 口 L たる 文 ぬ の 蒸 静 サ 木 寄 覚 影 ほ 0 な 吾 の 沈 字 湖 か 気 ン 0 末 風 ゃ 席 め べ 消 の 熟 コ を め 貼 な アイ ダ をと に 鴫 て 防 る る う バ 防 の ŋ 蓮 怒 ル 知 付 小 す ル ホ 残 立 受 衛 5 口 日 ŋ ŋ 家 の く n ŀ 東 粒 1 東 流 東 庵 付 省 る へてゴー ン 焼 (V ァ 京 ゃ 京 13 亰 尽 政 花 Ш の ス 夜 野 は に ス 休 の ız 石 そぞ 秋 厄 婦 す 満 フ 穂 島 名 分 藤 昼 長 盆 む 暇 脚 榴 В 滑 紹 7 古 か 灯 か の つ し ろ 果 長 0) 無 介 め ヤ ル 田 旗 和 蔓 < す 実 事 所 寒 な な 月 鏡 る n ŋ ŀ ひ 裕 政 照 子 代 子 さ 0 0 果 草 狛 綾 ح < 産 会 四 団 新 手 ょ カ 虎 ひ ア と嚙 n ス じ 子 涼 ル ŋ 声 (III) 提 樹 子 の 描 犬 テ ょ 5 な に ゃ 墓 ば 返 13 げ 園 く ラ み n ぞ み 筆 目 す ム に L 次 忌 袋 の の の 人 の の 捏 持 く" 覚 の 入 夫 の 繕 身 底 葡 樹 径 団 ね を つ 昔 め を 整 る の の 茍 ひ 追 風 て 上 木 の ざら 観 栗 祖 沈 理 を 0 つ H 橋 み に 待 を ひ め 汁 父 今 頰 進 b 記 る むとて ょ 蚁 七 光 つ れ た 越 め 0 の に を ま を ŋ 京 京 京 り引 人 ŋ む ゃ る 残 ば す 良 生 ぬ 読 風 Þ つ 白 野 秋 せ 久 鳥 加 虫 暑 長 夜 ビ 撫 秋 秋 む 小 分 ŧ 露 る 奉 威 か 1 か 望 づ の 留 ıī 返 寿 彼 夜 来 の の 嶽 賀 な な 月 る 声 湯 る 昼 ど し す る 夜 岸 長 ル 囯

規子

葉

子

孝

池 の 杭 序 列 あ るご ع 蜻 蛤 来 て

大 大 花 手 野 錆 地 蔵 の ざ の ら 少 つ < 傾 晚 ぎ 夏 を 光 ŋ

京 草 間 香 子

ょ L ろ 乙 ع 女 芥 き に ŋ 縋 ŋ る ح 秋 弓 担 の 蜂 ぎ

ょ 秋

ろ 髙

颯

爽

た

る

父

の

遺

影

に

里

の

古

酒

保 冷 剤 入 n て 届 く Þ 秋 茄 子

黒 雲 の 重 な る 入 ŋ 日 野 分 前

窓 の 時 開 折 け 七 ŋ 月 休 の む 風 秋 通 日 和 す

莱

京

岡

村

純

子

四

方

ょ

朝

뇹 の

稲 秋 槌 穂 風 早 の ゃ 抜 風 く を る 捉 へて 古 道 う の ね 道 ŋ 祖 を る 神

薪

能

始

ま

る

前

の

火

の

匂

ひ

つ

す

ら

ح

茜

会

津 色

東 京 桑 原 美 子

通 自 販 ŋ 抜 機 け の 釣 で ŧ 銭 る に 横 あ T る 秋 残 ま 暑 か つ ŋ な

マ

ĸ

ン

ナも

ケメ

ン

ર્ષ

去

敬

老

0 立 母 秋 う

読 ゃ

と

吾

な 藩 埃

赤

さ み

L の ح

薩 古

摩 書

切 の

子

に

新

酒

注

۷,

В 1

友

人

縁

者 過

台

風

来 H

> や ゃ 祭 か か ス ゃ に 1 歩 テ 幅 ツ 1 広 に プ げ 下 0) て 切 駄 ゥ Ġ ォ の れ 1 笛 開 キ 吹 所 ン

秋

爽 爽 菊

花

茶

0

香

ŋ

硝

子

の

テ

1

1

ポ

ッ

椿

O

実

落

世

ば

土

に

硬

ŧ

音

晴

衆

尤

ŋ 家 族 が つ 東 つ 京 く 小 か ŧ 池 氷 清

裏 に を 水 す の 鞄 滲 み 0 出 底 す は ζ" ら 瓜 扇

13

秋

糠 鍵

床

ح 隈 築 無 地 < 照 に 空 5 す ŧ 今 地 秋 日 の の 風 月

ほ 路

つ

か

ŋ

地

を 武蔵野 宿 L 砂 秋 日 地 傘 宏

子

ŧ 主 頁 風 の മ の 秋 山 散 Ľ め 歩 墓 ŋ 道

ع 吾 お な じ 歳 な ŋ 秋 日 和

夫

京

莱

村 紀 子

- 21 -

H 広 瀬 俊 雄

城 眼 下 を 秋 町 の Ш 流 る

0

を 銃

行 谷

<

の を す

あ

とさ

ž

赤 雀

鹼 ىح

威

戸

を

抜

け

来

る

防 畦

%

の

水 肩

確

め

月

山

間

の

見

渡

限

ŋ

晚

か

な 尽 蛤 ち

浜

大 稲

楯

雅

子

Ш

格 初犬 子 秋 戸 0 13 凲 朝 顔 渡 か る Ġ ゃ む 大 城 下 手 門 町

名 鯱 古 0) 金 屋 城 0 0) 尾 堀 鰭 の Ø さ 深 は さ Þ Þ か 初 芒 に

町 Ш 桔 梗

草 ゃ か の に ブ 天 ル の 1 抜 拡 け ٣ た る る 勢 朝 か か な な

露 爽

7

ル

バ

ム

の

楽し

き日日や

夜半の

秋

旧 故 散 爽

丹 恙 無 沢 < 0) 揃 ひ ŋ て 日 黄 人 金 敬 老 鰯 雲 日

野 喜 尾 明 子

H

綾 子 思 ふ 棗 さ は さ は 吹 か る n ば 魚

に

振

る

塩

0)

湿

ŋ

Þ

夕

野

分

秋ぬ秋

露 忽 モ 草 然 ル ح 夕 を ル 曼 夜 の 珠 空 沙 壁 の に 華 な ۲ 立 み ŋ つ だ つ 去 ح ŧ 年 ぞ 秋 の 思 の 位 ኤ 置

0

西 才

子

流

n ャ

杭

12

動

か

ぬ て

赤

蜻

つ

ご

つ の

の

幹

に

縋

ŋ

法

師

水

団

を

昼

餉

15

作

ŋ

震

災

忌

ジ 小

1

の花

真白なる佳

き日

か

な 蛤 蟬

純

ゃ の

か 屝

朝

開 Þ く 青 れ 年 ば 彼 さつ 女 を ع 伴 風 ひ は 来 秋

る 姓 郷 数 で の の 呼 話 B ば H の る 増 弾 え ţ に け 零 ŋ 余 白 子 木 飯 槿

る 横 集 浜 ひ 秋 Ш 海 棠 郁

b と ど め ず 秋 0 潮

舟

小

屋

の

跡

Ш わ 蜂 農 舟 草 < 婦 静 は か づ 野 15 銜 湖 良 着 を 飛 濯 渡 び ぎ κΦ n を け ゆ ŋ く ŋ

帽 **7** の 並 び 浜 甘 田 藷 掘 賀 る

赤

Ħ の な の

楳 恵

子

猫 過 る ゑ の ح ろ 草 の 揺 る る 路

朝 の 風 コ ス Ŧ ス ま で の 散 歩 道

三 木 曹 7

稲 H 照 光 ŋ 出 雨 蜻 窓 蛉 を か 細 す むる く 開 に はたづ き た み ŋ

新

松

子

防

風

林

の

ざ

わ

め

ŧ

ぬ

星

半 雨 玉 戸 の 引 ゆ < つ 胸 た に ŋ 啞 使 蟬 ፠ 飛 扇 び 子 来 か る な

新 奎 子

子

夏

草

Ш

目 生 ひ 色 ح か 草 つ減 さ を n りふ 供 て たつ 来 夫 る 減 の 歳 ŋ 忌 し 月 て吊し + 敬 余 老 В 柿 年

月 覚 今 む 宵 れ 卯 ば 年 台 風 の 明 夫 け の の 現 青 れ ŧ 空 な

進

大 朝

水

夕

B

薬

滴

芙

蓉

Щ

崎

大

Ġ ゃ 嬰 ぬ 泣 漢 く 字 力 変 换 手 に 足 12 L

秋

蟬 な

儘

+ 鰯 彩 六 夜 别 の n の 厨 0 風 握 の 懐 手 妻 13 ಕ を ŋ 卓 げ に 待 ち 野

0

葛 山

の

花 Þ

سح

بح

落

山

の

夜

胡

桃

轢

か

る

0

の秋流風 呂 洗 敷 ኤ 赤 京 ŧ 菓 吾 子 が 名 包 Û み は 母 恒 盆 の 客 横

L ゃ 家 族 写 真 の 色 褪 せ て

ゃ ぜ 田 ん 店 ま ゃ の は 縁 マ ŋ 切 す ネ 寺 れ キ に ば ン 読 裾 丸 経 בא 坊 n 田 の 音 主 て

さ

ゑ

う 深

等 厚 0 竜 集 し 媏 ഗ ひ 音 に 大 綿 ば 静 音 香 か か 響 花 に ŋ ゃ 火 沈 な に 花 る ţ 拍 火 白 大 手 散 花 ŧ 湧 月 る 火 <

山天雲

伊勢原 佐 藤 和

子

の ど 野 画 引 良 見 ど 着 ŧ て の 台 L 横 風 畑 に を ゃ 芋 Þ 韮 茎 ŋ 干 過 の す す 花

旧

ਣੇ

映

峡

A3 る つ 岡 音 る 大 堰 の 水 峰

Ш 清 爾

子

秋 Ш 0 見 Ø る ガ ラ ス を 磨 ž 1+ ŋ

鎌 履 持 ž ち L ま ま ま ŧ 洗 0) _ ኤ 服 셭 あ 靴 ŧ 秋 つ 群 の n 夕

石

ろ

に

火

花

散

5

L

て

草

を

llX

る

玄

L 目 K m 在 X す 海 萩 の 野 風 Zı. ち 子

仏

は

伏

秋 碑 露 座 彼 മ 岸 校 夫 歌 の を 遺 濡 せ 5 し す 杖 秋 つ 時 ŧ 7 雨

師 雨 の 隆 忌 来 て る 風 紺 に の 揺 輝 n < ゐ る 秋 秋 茄 海 子 棠

m 凶 宮 﨑 细 恵 美

0 薄 湖 野 の に 村 霧 ક の う 隠 , V し 41 て か 61 ま ع ひ 鬼 H ഗ 害 ŋ

捨

て

畑

ゃ

ジ

ン

ジ

ヤ

1

の

花

我

が

背

II

ど

寝 海 百

ŋ

く

残 八 月 業 ゃ の 夫 草 待 の 包 ち を ひ れ の ば 香 ば 虫 時 し ŧ 雨

m ¥ 望 月 鮍 男

け

ኤ

白

露

電

柱

影

に

H

n

が の ŋ 顔 版 を 剧 晒 す ŋ ゃ 0 ī 秋 人 の 誌 風

0

太

忌

Þ

素

つ

ぴ

L

台

風 宰

は

迷

走

5

L

ž

ス

マ

朩

鳴

る

門

喝

Ш

に 佇 ち 万 緑 を 見 渡 せ

鈴 百 മ 風 止 る る

牊

藤

原

代

子

王 関 の 0 片 鍵 目 0 鈴 を 瞑 0 音 る 秋 秋 暑 め か H な ŋ

花 里 藪 Þ の 真 秋 昼 0) 田 の 跨 暗 く" さ 髙 秋 架 の 楯 雷

大古竹明

野 手 術 終 ż た る 犬と 駆 け

静

跗

荻

野

'nп

靐

子

猫 草 帰 の る 花 勿 ゃ 来 の 被 浜 災 の の 波 防 L 潮 づ か 堤

返 浂 ŋ 0 0 耳 雲 追 ひ 0 か 明 暗 る 台 虫 風 の 裡 声

0 早

露

草

の

< 光 を 歪 め た ŋ

の m 伸 岡 び 小 Ш 明

単 初 城 単 線 線 嵐 址 を は 乗 秋 王 峆 ŋ 夕 の 継 焼 小 ぎ 先 釣 指 瓶 端 反 向 落 吾 ひ ŋ L 亦 を 返 か な 紅 ŋ る

美

岡 藤 本 節 子

ひ ع 雨 の あ ح の 風 呼 ؿ 青 뾴

蟬 無 花 肼 果 雨 を 淀 捥 み ۷, し ゃ ま た ち ŧ ま の ち 城 の 溢 濠 n

晴 れ 渡 る 富 士 を 真 面 13 稲 収 れ ŋ

念

入

ŋ

12

磨

く

シ

ン

ク

ゃ

白

露

の

日

大 長 文 昭

地

傾

雲

静 岡

新 父 \equiv + ŧ + 母 団 は 子 百 軒 ま 12 で 地 墓 洗 蔵 盆 ኤ 鯉

0

ほ

つ

か

ŋ

浮

፠

水

の

秋 な

新

聞

の

肘

張

ŋ

付

く

残

暑

か

利 酒 ゃ \neg 中 屋」 ع 読 め る 不 折 の 書

の 行 m 方 岡 ゃ 加 野 分 山 晴 7 N さ 子

0

詠

歌

を

秋

風

15

乗

せ

峡

真

昼

起

ž

抜

け

の

雲

鉛 酒 缶 筆 の の 芯 点 字 を 尖 な 6 ぞ す る 厄 ゃ 虫 日 か 時 な 雨

米 夕 櫃 に 溢 厨 る の る 窓 米 に ゃ 動 虫 く の 声

岡 石 Ш 裕 子

ζ"

ら

۲"

5

の

乳

歯

そ

の

ま

ま夏

終

る

葛

ഗ

葉

の

鉄 つ ビ

砲

人

を

鷩 、 涼

か

す た 灯

引

売

ŋ

6

ぱ ナ

づく

水

城

め

ζ

コ

ン

] 近

ŀ

の

夜

業

の

残 子 ゲ 規 IJ 暑 の忌 ラ な 豪 や類ば ほ 雨 引 明 るシャ 手 け 重 ゆ < インマ た 朝 ŧ の ス 桐 虹 カ 箪 ッ ۲ 笥 重

切 ŋ 分 くる 汁 本 の 滲 多 み ع

み

俎

板

12

梨

に ひ け 触 ع る れ 墓 h な の ば ŧ 裾 か ŋ Щ な の る 峡 撓 0) 赤 み次 紅 ま 葉 h 郎 ま Ш 柿

索 び は 石 ス の マ 窪 朩 み 頼 に ŋ ゃ つ 文 椿 化 の の 実 H

0

検 飛

呂 杉

絮 影 ح 飛 の 粒 ぶ 渡 を Ш る 風 の 平 に 向 瀬 零 かうの の し 水 て 澄 稲 鉄 工 の め 花 所 ŋ

鳥 穂 ひ 御

落

合

ひ

の

水

音 高 삵 水 l 成 草 の 瀬 絮 真

紀 子

修

- 25 -

秋 蟬 を < ぐ ŋ 勿 来 の 詩 歌 道

風 Ø 盆 灯 映 Ø る 雨 の 石 畳

金 沢 中 睦 子

0 盆 老 す 過ぎ じ Y 雲 の の の 瞼 手 凛 持 に ح ちぶ か 張 げ さ ŋ た ŋ た や猫 あ ŋ る 涼 を抱 秋 新 ŧ 暑 た

鐘 倒 楼 壊 0) ഗ 瓦 瓦 礫 黒 の く" 下 ゃ ろ 草 史 の 0 花 古

iR 越 ち 子

雨 H 予報 石 に は 水 づ ほ n て · つ の づく 雨 秋 残暑 の ば か な ß

ど

雷 焼

昼 瞇 餉 ታ 0) 岳 輪 玉 誰 虫 か 胸 12 に 止 す る が 赤 ŋ ع た h る ほ

0

止

ŋ

木

を

取

ŋ

፠

庭

0)

秋

茜

さ

6

ダ

13

ኤ

る

は

伊 藤 音 子

金

沢

曳 か n 行 < 浚 渫 船 ゃ 雲 0 峰

禅 青 岩 寺 田 煙 0) ょ 苴 真 ŋ 谷 朝 竹 に ふ 番 n 昂 の 合 ኡ 風 水 豹 風 の は b 秋 ኤ 音

新

涼

ゃ

芝

に

鳩

来

る

雀

来

る

ΙH

友

0

問

は

ず

語

Ш 墓 そ ح < に 所 の だ は 沿 供 か み ኤ 華 ح の 昭 早 か 強 和 稲 ん ŧ か の の 香 5 家 香 は か 砺 並 な んと 波 み つ 平 法 鎌 秋 野 師 暑 か 蟬 丁

沢

髙

田

み

子

新 た 金 泥 の 経 つ ゃ め け ŋ

沢

豊

 \mathbf{H}

高

子

涼

鶏 読 鳴 の ŧ 僧 て 残 暑 煤 0 ح 大 نتى 地 蹴 護 上げ 摩 涼 た ŋ

転

秤帳あの点や 菜^買す を 百 売 面 る 相 婆 ゃ ゃ 赤 霧 の ま づ < ま

手 爺

小 矮

舟

寄

せ

百

万

石

の

松

手

入

沢 松 井 佐 枝 子

n 風 て 波 花 が 野 風 湖 大 追 ž ኤ < 展 ゆ 鬼 H 遊 た 秋 び ŋ 茜

夕 鳥 日 天 ŧ み 辺 れ 取 を 草 の 絮 ŋ

新 芒 鶴 さ

松 原

子

堀

の

ŋ ح 萩 石 0 Ш 道 純

子

- 26 -

黒 径 渡 板 る ıΞ 沢 今 蟹 Н は の さ 法 み 語 振 ゃ ŋ 萩 F. の げ 寺 7

秋 薄 の 0 空 穂 音 夕 か B ŧ に 回 な す び く ij 銀 コ 波 プ か 夕 な

金 沢 河 野 尚

子

用 処

水

ഗ

清

し

ž

音

Þ

梨

熟

る

る

暑

の

0 天 コ 稲 ス 辺 川 モ 15 ゃ ス 身 の 修 を 雫 復 乗 た ŋ ば さ ね 出 n て 剪 て ŋ 千 松 É 枚 手 H 入 田 ŋ

な 萄 る の 秋 熟 る 蝶 る の 影 七 金 地 色 沢 に 崖 道 に 映 Ø 垂 場 る n 啓

野

葡

大

61

谣 早 大 īF. か 稲 海 の 0 洋 波 ヹ 館 囲 đ. 丸 茶 房 ~ح 円 や小 ع 蔦 小 紅 学 来 葉 る 校

の

ኤ

型

の 葉 百 + 日 0 風 に 鳴 ŋ

虹

+

歳

な

る

歩

の

兄

の

慕

酒 秋

米 空

മ

幟

立 供

つ

田 0

ゃ

秋 槍

夕

子

奴 兵

毛

舞 洗

白

Ш

の

風

に 連

早

稲

ഗ

香

里

0

八 厨

手

の

丰

止

め

幾

度

夕

月

夜

軒 蜑 母 町 の 低 爪 0 切 小 路 る 軒 の 縁 長 果 側 て ゃ 沢 は 処 の 秋 暑 杉 の 0) 本 草 海 朝 年

ž

=

屋

ゑ

<

ま

Ŧ

ン

を

n

避

難

所

稲

の

花 塚 焼 ኤ ኤ

茜 分 の 立 乱 2 舞 列 島 ゃ 玻 を 璃 吞 の む 美 予 術 報 館 円

秋 野

沢 南

子

路 地 た ţ ろ し て ゐ る 島 0 猫 恵

夜 子 宵 音 の の 雨 蔵 ま 溜 に ち め 寝 ま つ か つ ち さ L 処 れ IZ 暑 ワ ts 0) イ 酔 厨 ン 芙 か 樽 蓉 な

昨 雷

待

髙 輪 ゃ の 記 夕 憶 顏 路 0 ま 地 ま を の 明 碧 る ŧ う 湖 す

子

登 大

遠 僧 百 ざ の か 読 る 経 後 ら う ろ ら 姿 う ゃ 秋 盆 澄 の め 月 ŋ

12 寂 ؿ 沢 る 五 輪 塔

秋

深

し

古

刹

北 Ш 禮

子

信 子

仚

沢

松

下

- 27 -

内 雅 塩 井 志 津

瞾 鑅 ح 老 翁 語 る 爆 忌

身

に入

むや

ブ

ルー

シー

ŀ

まと

ひ

隅 嗣 ع 鳥 居 稲 穂 波

の 声 古 刹 に 残 る 女 駕 籠

秋 盆

波

ゃ

か

b

め

群

n

釆

ぶ

船

溜

ŋ

河 原 昭 子

落

蟬

の

声

し

ゃ

が

れ

夕

ま

く"

n

ح

異

邦

慕

じ

山

虫

津

魚 宿 新 靴 焼 題 涼 あ く香 に Þ ኡ 泣 糊 れ た ŧ の さ だよふ べそ顔 効 う き な た 夕 ゃ 玄 る つく ベ 関 大根 コ 盆 ッ つ 蒔 < の ク < 帽 L 家

ť 尾 谷 渡 末 枝 爺

の

畑

空

缶

百

の

威

百 H 畠 拵 の 水 運 ぶ

倒 鋏 壞 研 の 跡 地 な 名 き ક 風 な の ŧ 庭 草 に ん 出 の 花 中 7

敦 Ħ 倉 谷 す 美

山 月

の

声

風 待

Ø

击

澄

秋

彼

0

竜

穴

塞

ぎ

の

出

を

つ

ゃ

更

地

の む

ど真

カ

ン

ダーに「立秋」の文字息を吐

藤 竹 土

式

部

越

え

L

伐

るや

行

け

IJ 女 蔵 ア灯 の 舞 ኤ 重 ŧ 新 戸 羅 L の ま 鐘 る ばつたんこ 桐 芙 蓉 葉

酒

天

碑 籠 の のこる古 寺 苑 に 刹の 猪 の ぬ た 場 H

曾 マ

良

0)

ま ひ 住 ኤ て 古 山 陰 民 に 家 散る 酔 芙 蓉 葉

敦

賀

靍

勝

子

跡

を 鳴 < 知 ゃ る 漢 日 自 を 慢 終 の ኡ 勝 ろ 手 ろ 汁 口

敎 ŢŢ 中 Ш 雅

の 実 Ø を 迫 しごく媼 る 峠 の Þ リズミカ 薬 売 ŋ ル

紫

蘇

宵 秋

闍

の

朝

古

刹

の

僧

の

下

駄

0

音

名

物

の

ح

ろ

ろ

汁

ح

Þ

母

の

里

の 短 き 生 の 鳴 ŧ す

落

蟬

L ど行 田 峠 け 敦 か ど Ŋ ゃ ら も藪 鬼 落 中 胡 の 水 桃

優

月

宵 闍 に 始 ま る 仮 面 踏

宵 闇 ゃ 辿 る 家 路 13 迷 ひ 猫

大 阪 入 Щ 繁

測 墨 量 染 器 の 担 砂 **〈*** 利 ズ 踏 ボ む ン 音 に ゃ 草 新 じ 松 6 み 子

0 E ゴ Т ン ۲ の ラ 影 の 飛 影 び 世 さ 野 う を な 走 望 ŋ の た る 月

ے

ح

か

ら

は

山

径

険

し

鬼

薊

幼 奥

登 住 職 n の ス 盥 テ テ に コ 沈 で め 撞 < 朝 の 瓜 鐘

13

福

島

吉

美

W

短 鮎 パ 狩 ン の ま で 東 づ 京 笹 竹 ^ 発 で つ Ш 盆 面 打 の 僧 つ

0

塩 飴 を 含 み て 墓 地 の 草 刈 女

፠ 界 る 隈 里 は か 乗 つ ŋ て 継 く゛ 塩 バ 田 ス 赤 ゃ ح 盆 h の IZ 月

岛

村

上

和

義

子 V

を

0

月 野 夜 を 仕 仏 見 事 の に 讱 0) 土 裸 手 明 電 ま る 球 で走 3 曼 シ る 珠 ン 車 沙 踏 椅 子 t

> 0 غ 枝 ソ あ 幼 た

な

め

し

て

蜻

蛉

の

渡

る

下

乗

豆

伸

1

ダ

ŋ

幸

公初

秋 盛

ゃ 12

白

波 蔭

尖 を

る 拾

吉 ኤ

野 庭

Ш

В

H

祖 名 闌 谷 で 誘 0) 黒 ひ 斜 込 面 ŧ ま 農 D 法 れ 51 て 大 秋 蹞 豆 暑 の 引 輪 Z し

坊 0) 匂 ひ の 石 記 井 憶 天 木 花 内 粉

マ

ヤ

う せ ぜん 書 ŧ の の 61 師 つも の 文 字 の 角 弾 に む 咲 秋うら き登 る 5

倉 小 は 空 つ IZ ح な ŋ 地 虫 鳴 <

牛 米 の 寄 赤

ま つ に 新 藁 の 小松島 香 ゃ 岡 牛 生 田 る あ

ゆ

み

つ飛ぶ 水 く の ፠ の 俘 る 照 る 注 虜 小 **く** す 文 の さき 田 る 残 多 ん せる 回 ŧ 手 B す 句 大 ゃ めが 秋 会 É 虫 な か の 送 ね 手 な 蝶 橋 ŋ

き

В 平

岡

功

- 29 -

Ŀ 畸 丸 本 祥 夫

青 青 防 水 1 空 0 卆 鳴 壕 ト る 奥 尻 地 方 ょ の 平 ŋ 暗 赤 南 線 ŧ < 瓜 ま に な の りに 滴 蔓 麦 n の け 畑 ŋ 先 ŋ

西 海 山 敦 天

主

堂

見

ゆ

る

丘

ょ

ŋ

蟬

時

雨

秋

ゃ

遠

野

を

渦

る

雲

の

影

の 鴨 黒 灯 ゃ の の 淵 窓 入 は b 江 幕 ક の 色 形 に V3 13 か ろ 点 は に ŋ ŋ 稲 ゆ を き 光 る

み う 7 る 地 層 に 影 ゃ 秋 の 蝶

0

な

秋 漆 初 白

る 台 風 圈

迷

走

翻

弄

さ

る

宫

崎

中

山

宣

ひ

出

を

灯

す

ŋ

の

迎

H

蝶

ゃ

時 秋 化 寂 の び あ ゃ ح 床 広 軋 る ゃ み さ た しき秋 る 煉 瓦 の 館 空

Ė Ш 芳

教

秋

0

蝶

沈

み

つ

浮

き

つ

隠さ

ŋ

世

銀

河

濃

ž

島

村

灯

の

乏

手

を

挙

げ

て

子

等

往

く

歩

道

鵙

の

晴

稲 函

0

走

る の

黒

雲

喪 ゃ

0 霧

帰 深

h

館

മ

夜

汽

笛

<

0

ち さ 産 秋 想

ち

は

は

の

島

か

ざ +

波 0) 子

野

分

て

家 俵

うちそと

軋

み

鳴

出

新

米

0

縦

隊 Ė

直

立

潮 葛 蔦 肥

腍

る 花

百

+

H 沿 0 戸

の

不 る

気

翰

0

運

河

水

夫

0

家 輪

紅

ク 7

叫

< 火

埴 焚

松

を

焼

ベ

門

<

風 鍬 鱛 圈 13 家 2 養 Ш < 0) 古 殖 闇 芋 Ш う 掘 の なぎ逃 ŋ 武 0) 勇 思 ゃ げ

> 案 栗

か の 반

な 飯 ŋ る す

0

尾 台

廃

の 平 独 那 安 黚 虫 中 す だ 盆 <

砲 杜 の 弾 の 時 跡 に 御 _ァの 水 n 落 に す

ら 白 西 島 原 波 星 宮 星 月 流 る 夜

勉

鳥 味 さ 居 ょ 達 史

清

神 桃 白 ひとつ分け合ふ老のヒメフォ ح 桃 成 の る 王 祭 女 の の 獅 ۳ 子 費見城 ع く 饗 夜 の の 神 1 ク 卓 酒

軒 眉 蚊 盆 風 遺 死 吊 月 の ŋ 火 月 の に 0) て 没 淡 ほ 棹 誰 きに す く" 13 ર્ક る 糸 L 通 発 畤 て 干 ß 7 の す ゐ ぬ ŋ あ 白 た 昼 渡 離 霰 ん ŋ の 島 絣 ず 路 真 か な 糸 地 便 色 利 真 浴

O

鶴 読 た 蔦 天 来 は 窓 被 め ると記し野辺より戻 本 を 嗅 ኤ の ぐ煙 叩 指に 村 く 草 の 音 の花 大 工 なく 雨 の 房 文 たば 蚊 初 月 りけ 0 この 紅 果 名 残 香 葉 ŋ 2

0

毎月25日発売 定価1000円(税込)

ました。

お詫びし

て訂正します。

正誤

梅

雨

入

の

梅

雨

入の

櫓

ゃ

狭ᡈ

深 暗

き L

間。狭

間 の

奥 奥

10月号72ページ上の田中秀幸さんの句に誤りがあり

お詫びと訂正

漢詩の魅力を語る



〇日本人にとって「祈り」とは何か

俳句に祈りはどう詠まれてきたのか

小林宣彦 (國學院大學)

〇「祈り」が込められていると感じる句

特集

漢詩の世界

篠崎央子

荒井千佐代

石黒英進

スティーヴン・H

٠

ギル

ベルリン

鈴

木

波

江

連充 観実 陣の 宮坂節生 田岛健一

背木亮人

(俳句界 甲斐睦朗 井上泰至 松本菜夏 坂口昌弘

日本

実の投

【注目の句集】 中村姫路 斎藤信義 層日 『光る雪』

4 | -部変更の可能性があります。 ポ合計 文學の森

(グラビア) 俳句界NOW

漢俳とは何か

竹田遼生

蜇 振華

円満字二郎

塚越義幸 小津夜景

日原

傳

塩見恵

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

〇私の「祈り」

緒方

藤本美和

若林哲哉

小川軽舟

桂 敬

飯

田

晴

同人会だより

第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集

応募を期待しています。「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数のた賞です。年一回、同人より作品を募り優秀作品を表彰、故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画し

応募資格 「万象」同人に限る。

者 内海良太、江見悦子、小林愛子、福島せいぎ 題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明 の百字詰原稿用紙(B4判)とし、冒頭欄外に品 15句、未発表作品に限る。

締 切 令和7年1月31日(金)

柳澤宗正、

曽根

满、

中條睦子

選

宛 先 〒420-0803

Eメール os08080918@outlook.jp 杉澤 修静岡市葵区千代田6-6-27-1 杉澤 修

入賞発表 「万象」6月号(優秀作品、選考経過を掲載)(郵送、Eメール添付送付、いずれも可)

螺旋

階段秋夕焼の降りて来

ほがらかに雲かがよふも良夜なる

中村 千久 荻野加靐子

(静岡)

人会総会で受賞者を表彰。

10月の「万象」オンライン同人句会高点句

5 4 6 9 名月や羅漢のをどり出しさうな 杖 珠 つぎつぎと雲を乗りかへ走る月 給水の列に割り込む 秋刀魚焼く珠洲の切り出し七輪に 洲 使 舟を湖心にとどめ月あ 走り男盛 ふ妻の魔女めく十三 の の壺にひと筋月 話一巡 ŋ の が 道 る 村上 江見 成瀬真紀子 右近 (射水) (東京) (射水) (徳島) (七尾) (七尾) (東京) (足利)

湯畑 秋 沈黙てふ自己主張あり吾亦 窓に見て外に見て飽かず今日の 秋深し専業主婦といふ 鶴来るはげしき声を落しつ 玉入れの数ふる声や天髙 さはやかに産休明けのパンタロ 今日よりは一人の暮し鶏頭 の日や深き午睡の檻 来に人影落す夜業 の 包 7) 趣ひ て帰 燕 の とら 無 か 加賀 砂地 入山 鈴木 谷渡 喜多尾明子 山本とく江 成瀬真紀子 沢辺たけし 桑原優美子 繁幸 末枝 宏子 (ベルリン) (流山) (日野) (東京) (七尾) 舶 (東京) (武蔵野) (大阪) (射水)

3

(*旬頭の数字は点数を示しています)

9 8 3 12 11 10 7 6 5 4 2 1 正 解 紫 江 見 銀 指 H 0 鯖 0) 軽 のあたるところがほぐれ 戸 る ひに見 雲 しさとさび く触 の窓よりどつとシ 住法花 れ 5 1 H p * ŋ 13 n 陣 限 る ŋ ず 時 n 秋 備 深 間 骨 戻 てすべ 冷 淵 0 路 夜 董 0 h V 2 10 6 L 束 明 0) 12 たる 窓 鰹 220 市 0 陽 降 0 多 りて 0 0 雪 き 菊 初 信 ヤ る滝 るごとく 人 壶 咲 濃 ボ 0 夫 鴨 11 3 17 色 0 れ 13 か > 0) 0 0 子. 玉. h な 中 顔 音 降 階 形 富 飴 内 1 杉 茨 細 飯 石 12 4 海 林 H 木 見 HI Ш H 和 綾 風 良 龍 波

夫生實太茶

g

西 Ш 厚

全24回

第22 П

最澄

珈

琲

5

遊

П

も古今の

佳

句

名句 空所に

触

な ١

んでゆきましょう。

コザ れ

[3

の付く漢字を入れてみまし

生活、 比叡 ち込む僧 会のシステムが壊れ、 -城京かり Ш 立場を利用して賄賂をとる僧さえいた。 に が は 籠 近 少なく、 ら長岡 江 0 たのは 玉 の国 京 子どもがいて、 昌 19 歳 寺 混乱する時代。 さらに平安京 (20歳説 の僧とし t て生きるのをや 俗人と変わら ~ 修学や修行に の時だった。 これまでの 打 社

である人里を離 方、 山林修行に打ち込む人たちもいた。 清浄なる山で修行に励む人たち。 俗なる場

夫

子 太

女

郷 子.

最澄もそのひとりだった。 狂が中の 中の極行ので、 塵に誓 壁禿の有情、底質の有情、底質

「愚が中の極愚、狂ぬ山に籠る際に、

底に

独り飲 であり、 になる。 鼻舌身意 り飲まず、安楽の果、 ひとりでは幸せにならない。必ずみんな一 澄は自分を最 0 最 19歳の最澄がめざしていたのはそういう世 0 56歳で亡くなるまでそれは変わらなかっ 澄 |ないと誓い、「伏して願はくば、解脱の味、6つが仏と同じように清浄になるまでは決 低 の人間と位置 独り証せず」と締め括 付ける。そして眼 緒に る。 0 た。 幸 界 せ 耳

邨

公益社団法人 俳 人協 会

同人作品の佳句 エ見悦子

9

急流の激しさに恐怖を感じつつも、表現は平易で率直。淡淡は、実際に作者が聞いた音なのだろう。山を駆け下って来るは、実際に作者が聞いた音なのだろう。山を駆け下って来るくさんの流木が流れ着き、中には橋半分がなくなっている各「秋出水」は、今年の雨台風のことだろう。川の橋桁にたびんどんと橋桁たたく秋出水 佐藤 哲

感のある句。
「あらっ」という驚きをそのまま句に仕立てた。具体的で実行った。鍬の手を休めて、赤蜻蛉の行方を見やっている作者。畑で鍬を揮っていると、赤蜻蛉がふっと頬を掠めて飛んで畑で鍬を揮っていると、赤蜻蛉がふっと頬を掠めて飛んで畑 鉄 使 ふ 頬 を 掠 む る 赤 と ん ぽ 一店 網 洋 子

持つ季語の力は大きい。

嬰児を中心に家族の喜びと場の華やぎが窺える。「良夜」の

とした中に自然に対する畏敬の思いも。

万物を洗ひ出したる今日の月 内田郁代の始まりを知らせるように。切れのある端正な句。の始まりを知らせるように。切れのある端正な句。が差し込まない森に鳴き声が響く。夏の終わりを惜しみ、秋師蟬。オーシックツクとリズミカルに鳴く。早朝、まだ朝日8月も後半になり、秋の気配が濃くなる頃に鳴き始める法朝日まだ届かぬ森やつくつくし 大月玲子

月に恵まれた。「万物を洗ひ出したる」とは、よくぞ表現し

今年の十五夜は、場所や時間帯にもよるが、

素晴らしい満

綾子の忌齢追ひ越す長寿国 島野ひさげているようだ。「洗ひ出したる」の措辞が成功した。たもの。天地の間のすべてのものに光が届き、清浄に洗い上

偲ぶと同時に自身の長寿を祝い、それだけでなく、現在の日性81歳、女性87歳、いずれも世界一だ。この句、綾子先生を年だが、月数で追い越したことになる。日本の平均寿命は男を数えた。ひささんは昭和9年1月生まれ、綾子先生と同い綾子先生が亡くなったのは平成9年9月6日、90歳と半年

奉書紙を前にしているのではないだろうか。明るい満月の下、早速筆を持つ祖父は、お七夜のお祝いに名前を披露するため、中秋の名月の夜、生まれたばかりのお孫さんの産声が響く。 産 声 に 筆 持 つ 祖 父 の 良 夜 か な 「下 嶽 孝 一

本の社会に目を向けている。社会性豊かな句となった。

き」が良い。 おしい こうでは はない こうじゅう はいい こうじゅう という という という という という という でいる 作者 でいる 作者の という という という という でいる 作者 の あい でいる 作者 の 声の さい こう おい でいる 作者 の 声 と さ き 赤 蜻 蛉 の 本 才 子 単 を 行 く 肩 の あ と さ き 赤 蜻 蛉 の 本 才 子

さな白い花をつけ始める。一つの稲穂には百個もの花が付く旬から中旬にかけて「えい花」と呼ばれる、花びらのない小夏になると、稲は葉を増やすのを止めて穂を作り、8月上ひ と 粒 を 風 に 零 して 稲 の 花 ― 杉 澤 ― 修

る。「風に零して」が生きた。の小さな一粒の花に目を凝らし、風に零れる様を見届けていとか。開花時間は2時間と短く、自家受粉する。掲句は、こ

穴を塞いだ田に稔りの時が訪れ、落し水が終わればあとは収田の水が漏れて農家を困らせたりするそうだ。苦労して土竜農作物に害を与える厄介な生物。水田の畦近くにも穴を空け、トンネルを作り、ミミズや昆虫の幼虫を食べて土を隆起させ、と、またその水を「落し水」(季語)という。土竜は地中に経が垂れ始める頃、水口を払って田んぼの水を落とすこ稲穂が垂れ始める頃、水口を払って田んぼの水を落とすこれを塞いだ田に稔りの時が訪れ、落し水が終わればあとは収出の水が漏れている。

満月にETの幻影を見て遊び心満載。特別な名月を楽しんだ満月。子供の頃の夢を思わせる、心打つ映画だった。作者は丁を乗せて自転車ごと浮遊する場面である。背景には大きなグの映画『ET』の一場面を思い出した。少年が宇宙人のEかつて世界中で大評判をとったスティーブン・スピルバーかつて世界中で大評判をとったスティーブン・スピルバー

に寄り添う作者の姿勢が嬉しい。

穫を待つばかり。半年近くにもおよぶ稲作農家の苦労や喜び

でいる蜻蛉の輪は綺麗なハート形。明るく俳味溢れる句。おりなくてはいけない橋である。そんなところを平然と飛んど下乗橋に差し掛かった。車馬は厳禁、駕籠からも馬からも尾をふくみあって輪になって飛んでいる場面である。ちょう「となめして」とあるので、蜻蛉の雌雄が交尾して互いにと な め し て 蜻 蛉 の 渡 る 下 乗 橋 ― 岡 田 あ ゆ み

通い合う。瞬間の一世界を詠んだ。 後である。秋の蝶の影と作者の間に生まれた緊張感がそこに後である。秋の蝶の影と作者の間に生まれた緊張感がそこに地層に秋の蝶が影を落としている。まだ日差しの強い秋の午や砂などに混じって、小生物の遺骸なども見られる。そんなるので、波状に褶曲している地層なのだろう。よく見ると泥るので、波状に褶曲している地層なのだろう。よく見ると泥み けい 一直 下 敦 子 本 み う て る 地 層 に 影 や 秋 の 蝶 山 下 敦 子

「白露」が生きている。真澄さんが一昨年発表した特別作品上げ、束にしたそれを軒に干している瑞瑞しい情景を詠んだ。て手織り工房を主宰している。この句、蚕から引いた糸を仕凝って白くなる意の美しい季語だ。作者は沖縄県工芸士とし凝って白くなる意の美しい季語だ。作者は沖縄県工芸士とし二十四節気の一つである今年の「白露」は9月7日。露が二十四節気の一つである今年の「白露」な 渡 真 利 真 澄軒 吊 り の 棹 に 糸 干 す 白 露 か な 渡 真 利 真 澄

る。その境地を大切に、良い句を作り続けて下さい。コメントに「難しく考えないで楽しんで作ればよい」とあ新絹の 束解い て香を 揺りた たす星満つる 頃まで 秋蚕 ひき ゐたり

秋蚕」の句群から二句

馬 花

大 村 か 子

鳩 朝 水 焼 小 P 屋 13 0 0 ち 番 昭 < 0 和 n 0 遊 鳩 ま Si 0 ま 吉 夏 P 止. 0 杜 ま 鴨 若 2

花 水 水 咲 無 遣 け 月 n ば P 0 無 水 駄 水 0 花 弾 あ 0) S き 無 る た る 茄 3 U 子 雨 字 0 花 溝 蛙

馬

鈴

薯

0

花

0

真

白

P

夕

映

W

る

村

を

丸

と

包

む

大

夕

焼

干

瓢

干

す

雲

な

き

遠

筑

波

帯に住

棚

H

風

畦

13

5

5

15

5

彼

岸

花

経痛を患い歩行困難となり、 免許も返納し、句会への参 加も無理になりました。そ んな折、句友に温かい言葉 を掛けられ、会への送迎を お世話になっております。 趣味の俳句を米寿まで続 けられたのは、「万象」誌、 付られたのは、「万象」誌、 付られたのは、「万象」誌、 付られたのは、「万象」誌、 付られたのは、「万象」。 た。過去に佳句にとって頂いた句は、みな家の周辺で発見したものでした。自然豊かな田園地帯に住 温かい言葉の送迎を て頂



墓 世 願 今 生 我 根 肉 毎 孫 が 洗 は 0 話 身 が 生 朝 几 好 < か 5 好 魂 齢 0) を き 5 人 は は き 米 を ジ 今 0) 鏡 U° 5 は 曾 寿 ヤ 11 巨 か N が に 今 ズ 人ファン 孫 0 3 5 U° b 立 楽 が Ŧī. N 弟 \square 七 ま 変 7 人 5 を 癖 た 5 人 八 ろ と n 好 励 0) ず や 十 n 生 き 生 牛 ま 生 生 生 路 生 牛 身 身 身 身 せ 身 调 身 身 身 (" 魂 魂 魂 魂 魂 n 魂 魂 魂

宮西修

生

身

魂

徳島県は、唯一、電車の走らなかった県です。市の中央部に吉野川が流れ、架橋に予算を使った為とのこと。に予算を使った為とのこと。にも最河口に1700メートル弱の橋があります。2年前にも最河口に170×月山登り口へ。ローブウェイで6分、パゴダの塔やモラエス像の建つ山が望めます。私の町自慢となりましたが、是非とも御ば、かずら橋で有名な剣山ば、かずら橋で有名な剣山ば、かずら橋で有名な剣山が望めましたが、是非とも御来県を。



特別作品評

圌 本 敬

表します。作者は今回、北の大地の短い夏を詠んだ。 全道へ発展した。松原さんと同人の方方の尽力に敬意を 言われる。北海道は「風」の流れを受け継ぎ、 たことを喜び、語り合い慰め合う中に俳句を楽しむ」と 札幌市在住の岡本敬子さんは「人間に言葉が与えら 歩いても歩いてもなほはまなす野 札幌から

森羅万象全てが「刹那」の夏を懸命に生きるという作者。 その巌を飛び交う雨燕の姿を見た。短い夏であるがゆえ 石狩のはまなすの丘を歩いた。そよ風が心地よかった。 の野を歩いたのだろう。筆者も道央や道東を数度訪れ、 作者は日本海の荒波に削られた奇岩類を舟で巡った。 舟でゆく海の 裾をうす紫にじやが 巌に雨つばめ

ピンクの花を咲かせる。作者はどこまでも続くはまなす

はまなすは北海道の花にも指定されている。夏に赤や

す紫の花を咲かせた広大な光景は北海道ならではである。 葛桜は暑い時期にほっとする食べ物として広まった。 作者は山裾一面に広がるじゃが芋の花を見た。夏にう ひらがなのいこひの時間葛ざくら

作者も葛ざくらで一息つくいこいの時間を持ったという。

の炎暑を経験し、穫り入れや諸行事をこなしているうち 作者は短い夏に爆発的に咲く花花を巡り、 いつのまにか胸元の貝ボタンに秋風を感じたという。 ブラウスの貝のボタンに秋 風 ほ ĭ の 数 百

子

丸

本

祥 夫

友はわが人生の唯一の財産であるとも言われる。 しみ、人生最髙の伴侶としていると言う。また俳句・ 長崎市在住の丸本祥夫さんは40年にわ 森羅万象へ好奇心旺盛にアンテナを張り巡らして楽 たり俳句を継続

囲

蟬は土の中で幼虫から成虫になるまで5年から7年暮

公園の平和祈念像や平和の泉を訪れた。空が青かった。 のであろう。筆者もかつて長崎に住む友人と一緒に平和 見つけた。爆心地で生きる蟬の姿に生命の尊さを感じた すという。作者は長崎平和公園を訪れて多数の蟬の穴を

を憐れみ、懸命に鳴く姿に感動しているのであろう。 という。作者は「刻惜むかに」という措辞で蟬の短い 蟬は成虫となってからわずか1週間から1ヶ月で死 枝移り刻惜む かに 蝉の 鳴く

命ある限 り鳴 きた る 蝉 時雨

蟬は鳴くのは雄で雌は鳴かない。雄が子孫を残すため

を命の限り鳴き続けることに作者は胸を打たれている。 に相手の雌を探し鳴くという。地上に出てわずかの日数 雨 昼休息のあ りにけり

る事を恐れて本能で雨を察知して鳴き止むという。 蟬は翅が濡れ飛べなくなる事を恐れ、また触覚が麻 とがある。 景をいい、時雨が降ったり止んだりする様に突如止むこ 蟬時雨とは時雨が降ってきたかの様に蟬が鳴き出す情 作者は昼時にそれに接したのであろう。 また

命 ぬ

自 悦 句 子 選 鑑 賞

Elfred

落 葉

み な 影 ŧ 朝 欣 忌

冬

の

実

鳳 凰 堂

続

<

82歳だった。「風」誌はこの年の5月号で創刊55周年記 念号を出したばかりだった。 沢木欣一先生が亡くなられたのは平成13年11月5日

で終刊にして欲しい……」が先生の遺言だった。「風」 は平成14年3月号を以て終刊となった。 『風』は個人のものであって、団体のものではないの

|風」は戦後の混乱期の昭和21年5月、沢木欣一が

(15)

や社会性等の論陣を張って、戦後の俳壇に文字通り新し 広く糾合し注目を浴びた。また「第二芸術論」への批判 い風を送った。 心となって金沢で創刊された。各地の有力若手俳人を幅

に多くの功績を残した。 人を育て、自らも俳人協会の会長を2期6年務め、 昭和31年、発行所を東京に移してからも多くの有力俳

庭や道路に散る落葉は色とりどり。 ようだ。 落葉の光や影が、 つ落葉や、11月のひんやりとした影をまとった落葉など、 今日は欣一忌。昨日の木枯しが嘘のような初冬の朝だ。 沢木先生の人生と句業を象徴している 朝日に明るい光を放

ところに即物具象感がある。 新しい感覚。影の一つ一つを師の人生と句業と断定した 忌日における作者の眼差が、 句業の深さに及んだのが

(内海良太)

旅行吟が散見され、 江見悦子主宰は、 国内外よく旅をなさる。 句集の奥行きと味わいを深めてい (「砂時計」 本句集にも 1 6 6

らだと認識している。その実は赤く可憐で印象的。 る。「冬青の実」と「鳳凰堂へ続く門」。夫夫の色と形と も分かりやすい句。そのままストレートに伝わって来 都方面への旅で詠まれたものであることがわかる。 青」と書くのは、常緑樹で冬でも葉が青青としているか 「そよご」は、風に葉が「そよぐ」音から来ており、「冬 全体の景が目に浮かぶ。「そよご」の上品な響きもい 掲句も前後の「鳰の海」「御土居」の句と合わせ京

思い、「浮舟」と「匂宮」の物語を思い浮かべながら鳳 青」は千年の古都京都に、美的な美しさと文化的な意義 来上がった。因みに京都に住む私の友人に依れば、「冬 まま言うだけで、 める晩秋の季語。 が目に。感動し、心を動かされたのだ。それは旅情を深 着いた朱塗りの「表門」。その時真っ赤な「冬青の実 凰堂の方へと歩いていたに違いない。行く手には落 ば五十四帖最後の十帖の舞台が宇治。道すがら紫式部 を与えている木の一つとして、もみじ、里桜、 所で江見主宰と言えば『源氏物語』。源氏物語と言え 橘などと共に、広く認識されているとのことであ 奥には優雅な鳳凰堂。眼前の景をその 印象的で色鮮やかな気品ある一句が出

・風のしをり風がある。

子規 の俳 句鑑賞

林 徹

臥 見 ル 秋 海 棠 J 木 末 カ ナ

明 旭 年作。 『仰臥漫録』 に、「病状所見」と断って、

棠 朝為 向 ル 病 J 飽 寝 床 易 カ ナ +

本末は、岩波文庫では「こずえ」とルビしてあるが、原句にルビはない。筆者は「こぬれ」と万葉調に読みたい。秋海棠は鶏頭とともに、子規の大好きだった花。明治三十二年、初めて絵の具をもって絵を描いたのも秋海棠の花だった。身動きならぬ身体を、好きな秋海棠の花だった。身動きならぬ身体を、好きな秋海棠の方へ向けているのだが、秋海棠は大半が緑に隠れていて、やがかに本末しか見えない。しかし、その本末に咲いた楚々たる花は、見飽きることがない。秋海棠がいとしくてならないのである。この年、別に〈秋海棠に鋏をあてることが、一言で言さば、それは真率ということに帰結するくらい巾の広いものであった。それから秋海棠の一句一句についても言えることだが、もののいのちに深く触れていることで、中野重治が、『斎藤茂吉ノオト』で、子規の写生と茂吉の写生について、いみじくも次のような卓見を披瀝していたことが思い出されるのである。 句木ほ 末は、並 てあ

こ。一円を孕むものとして、しかし弧として現われたのであいなったという事情でなく、むしろ子規において、弧ー子規において半分であったものが、茂吉において一子規によいて半分であったものが、茂吉において

相当な数の佳句を見出すごとができるし、それらは決し佳句を拾い集めたら、三十五年という短い生涯の割にはで浅いという感想も生まれるのだろうが、丹念に読んでのようにして残された子規の俳句を読めば、駄作の山でのようにして残された子規の俳句を読めば、駄作の山でみることは否めない事実で、そこから子規の写生は平板のようにして残された子規の俳句を読めば、駄作の山で て平板な写生に終わってはいない。

た らちね 0 花見 の 留守や時 計 見 る

て、『仰臥漫録』 『仰臥漫録』に載っている一句。『治三十五年。「母の花見に行き玉 へるに」と前

くというので、母が一緒に連れて行ってもらい、そのこの日曜日にまた、碧梧桐が家族とともに向島の花見に行取りに行ったことを喜ぶ記載があり、それに続けて、次取りに行ったことを喜ぶ記載があり、それに続けて、次正 この年に書かれた「病床苦語」という長い文章に、正この年に書かれた「病床苦語」という長い文章に、正 とがさらに嬉しかったと書かれてある。

であるが、この「嬉しくて堪らなかった」も実にいい。帰られたので、予は嬉しくて堪らなかった」ということ気づかう心情が姿として現れていて、いい写生になって気づかましい表現にも感心するが、「時計見る」は、母をう、美しい表現にも感心するが、「時計見る」は、母をおして現れていて、いい写生になって気がから、「たらちねの花見」とい掲出句はその日の作である。「たらちねの花見」とい

。子規·写生—没後百年—」(沢木欣一編 角川書店) より抄出

=(0)

にたずねる抒情の源流

16

橋 本

清

旅にして 下の の赤のそほ船 沖を漕ぐ見ゆ (三・二七〇)

遥か沖合を漕いで行くのが見える。」 自分がいる) 旅にあって何とはなしに切ない気持ちになっている時、 山の下あたりに見えていた赤い船が、 今は

と、旅のあわれが一層つのってくるというのです。 か沖合を赤く塗られた船が過ぎて行く。それを眺めている 「もの恋しき」のモノは、その原因をこれとはっきり示 髙市黒人の旅の歌です。海に臨む小高い山の上に独りい 旅にあることを何とはなしに切なく感じている時、 遥

ちにもなったでしょう。 る作者は何だか自分だけが取り残されるような心細い気持 く官船だとする説があります。そうだとすれば、官人であ 「そほ船」は、赭(赤土)を塗った船。漁船などではな

(6)

さないで婉曲に言う接頭語。

この時代特有の語法です。ここでは自分だけがそこに取り 風景の遠近法の一端に話者自身もいることが明示される、 際に身を置いている感じを強調している。すなわち、その めて述べ直しているわけです。そうすることでその場に実 起きていると認識したうえで、そのことが「見ゆ」と、改 を漕いで行く。それが見える」ということ。今その事態が

しまった物事などに引かれる思い、すなわちノスタルジア ものは、遥か遠く離れた土地、過ぎ去った日々、失われて に伝わってきます。 残されてしまうような感覚が、この一語によってより明確 こんなふうに遠くを過ぎて行くものに引かれる心という

のほのと明石の裏の朝霧に

ほ

《郷愁》に通じる心情ではないか。

から離れないというのです。『古今和歌集』第九羇旅歌に の島陰に隠れて見えなくなって行く船の姿がいつまでも頭 「題知らず・よみ人知らず」として出ている歌です。 夜がほのぼのと明けてくる明石の浦の朝霧の中で、 左注には「この歌は、 島隠れゆく船をしぞ思ふ ある人のいはく、 柿本人麿が歌 九 四〇九)

それを同じく旅にある者が見送っている。これほどノスタ 港でした。遠くを過ぎ行き、やがて見えなくなる旅の船。 ジアをそそるものもないでしょう。 明石は瀬戸内を航行する船が風待ちや潮待ちで立ち寄る

という例が見えます。この出ヅはダ行下二段活用の終止形

したがって、結句を文法に忠実に訳せば、「沖合

ル

少し前に「刈り薦の乱れて出づ見ゆ海人の釣船」(三五六)

結句の「見ゆ」は活用語の終止形を受けます。この歌の

なり」とあります。



水筒と熱中症

大阪 入山繁幸

かき換い、帰宅するまで水の生活に慣れていた子供たちは初めての生活に慣れていた子供たちは初めての生活に慣れていた子供たちは初めての生活に慣れていたところ、学校から持たせて登校させたところ、学校から持たせて登校させたところ、学校からが間けば水筒にジュースなど清涼飲料水を入れる家庭が多いので水筒持参を禁むしているとのこと。水分補給は学校の水道水を利用するように指導しているたのだ。娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、娘は学校の水道水は臭いと言いがで、場には一般に表情がある。

になって帰宅した。今から思えば軽度ある日頭が痛いと赤い顔でふらふら

当たり前の今では笑い話である。わったことを覚えている。水筒持参が事もなくてよかったね、という話で終の熱中症に罹っていたのだろうか。何

熱中症対策に

千葉 鈴木美根子

種類の多さに驚きます。今や年代を問 描かれていたり、色や形、容量等沢山 温・保冷は勿論、可愛い絵がボトルに ち」などと方角を見つけてちょっとう 動かしては、「北はあっち、南はこっ 遠足などで目的地に着くとその蓋を りになり、方位磁針が付いていました。 ぐに水分補給をするように心がけてい もとより家の中にいても、 年は熱中症対策が叫ばれ、 的に応じていくつか持っています。近 わず多くの人が携帯しており、私も目 の種類があります。お店に行くとその れしかったものです。 肩から下げるもので、蓋がコップがわ その後水筒の進化は目覚ましく、保 私が小学生の時に使っていた水筒は 外出の時は 何時でもす

マイボトル

明から払りと筍とおらなろこと こ足や運動会の日、いつも母はどこ 金沢 松田好子

である。 である。 である。 である。。 である。。 である。 でのである。 でのである。

をバッグに忍ばせて出かけている。なだけ入れられる小さめのマイボトル私も句会には、保温に優れ軽く必要

佐野 木村君子

を潤しながら参加しています。 ポカリスエットやトマトジュースで喉 番OKです。毎月の俳句会の時には、 所の定位置に置いてあり、いつでも出 私の家には小振りな水色の水筒が台

ります。 の楽しかった旅の思い出が懐かしく蘇 ら南へ、 旅行にも水筒は欠かせません。北か 四国のお遍路の旅等、友人と

み合わせて上手に水分補給をしていき は、お茶やお好みのイオン飲料等を組 等も失われてしまいます。水筒の中に くことにより水分ばかりではなく塩分 控えめになってしまいました。汗をか ロナ禍の自粛で、外出や水筒の出番は をたっぷり飲む生活でした。しかしコ さて、今年は猛暑で大汗をかいて水

小さな旅

加 奥澤よし江

絶好の日和と思えた日の朝に、たっ

浜を後に帰路へ。愛着の水筒一本で足 り日が昇る。動き出す光輝く九十九里 をかじり水筒も空になる頃にはすっか 筒の栓をひねり一服を。 サンドイッチ 行く。静かな時間に身を預け、また水 昇り始める。たおやかに海原を染めて 栓を開けコーヒーを湯気と香りの中で ほぐれたところで腰を下ろす。水筒の からだを伸ばし全身が潮の息で溢れ、 九里浜。とっておきの場所がある。 ある。行き先は我が庭としている九 ドライブコースへ。日の出前の出発で 詰め、サンドイッチを作り、いつもの を濃い目に淹れる。淹れたてを水筒に ぷりの時間を得たら、先ずはコー 一服。朝凪の水平線の奥から日の光が 着いたら素足になりしばらくは歩く。 Ė

升瓶の水筒

る小さな旅である。

寿多映子

持つ兄と、小麦色の肌のはしこそうな 50名程がいた。その中に知的障害を 学した。団塊の世代で、同学年には2 昭和28年、墨田区の小学校に私は入

妹の兄妹がいた。

造などの家内工業を営む家が多く生活 は比較的安定した地域だった。 学区にはメリヤスやハンドバッグ製

分からないが、元気で幸せに暮らして の噂を聞いたのは随分後のことだった。 代わりであろうことはすぐに分かった。 だ。妹のリュックのふたをはみ出して の子供たちを引き取って育てていると 徒の中にその兄妹が私の隣の列に並ん 一本の一升瓶がのぞいていた。水筒の て欲しいと水筒を見る度に願った。 クラスが違ったのでその後のことは 廃品回収業の両親が、親のいないそ ある遠足の時のことだ。集合した生

「万象ノオト」投稿募集

▽5月号「靴 ▽4月号「踏 切」(12月末日締切) 下」(1月末日締切)

▽投稿先

▽ 長

さ

本文

17字×19行以内

· 17-1861 富士市広見東本町14 | | | |

₹

神田美穂子

北から南から

徳島城址公園(城山)について 徳島 平 出

功

いる。 政公が居城を構えた城山があり、延延4百年の伝統を誇って 政公が居城を構えた城山があり、延延4百年の伝統を誇って 開けた都市である。徳島市の中心部には、江戸時代蜂須賀家 南国徳島市は、四国三郎と呼ばれる大河・吉野川の河口に

華を今に伝えるかのように、昔日のままの姿を保っている。なっている。名匠上田主水(宗箇)作の庭園は、蜂須賀の栄現在は城址としての天守閣はなく、城垣のみを残すだけと

ている。 遺産を見ることができるよう、徳島中央公園として整備されこの広大な公園は城址公園としてのみならず、江戸時代の

伝えられている。 鷲を飼うからと申し立てて建造したことからその名があると位置する表口見附の門で、造りが脇戸付の医薬門で、幕府にその一つが鷲の門。この門は徳島城の巽(南東の方向)に

老などの姿を見ることができる。くの助任川から導水しており、黒鯛(チヌ)、鰡、海月、海「つ目が徳島城の内堀であった堀川である。この堀川は近

に由来している。の手前で駕籠・馬などの乗り物から降りて歩いて渡ったことの手前で駕籠・馬などの乗り物から降りて歩いて渡ったこと。三つ目が下乗橋である。御殿への正面入り口にあたり、橋

現在は往時を偲び、木製の橋が架けられている。にあたる旗櫓の下にあった数寄屋門にかけられた橋であり、四つ目が数寄屋橋である。この橋は徳島城の鬼門(北東)

窟遺跡であり、 確認することができ、 2千3百年前の縄文時代後期 - 晩期を中心とした岩陰 その他にも公園内には、「城 貝塚とその周辺の岩にはい 徳島市の史跡に指定されている。 Ш の貝塚」 が くつ ある。 か 0) 海蝕痕 約 4 千年 洞 な

春には梅、桜(蜂須賀桜など)、椿、辛夷……

发には紫陽花、牡丹、菖蒲、薔蕉 ・ 大には紫陽花、牡丹、菖蒲、薔蕉

冬には石蕗、侘助、山茶花、寒椿秋には萩、水引、杜鵑草……

秋冬を通して、市民の憩いの場となっている。 城山および城山周辺には、四季折折の花が咲き乱れ、春夏

卷 頭 作 家 十二月号)プロフィール



永* 博 3 出 子

松永博子さんは、 地元の県立大学卒業後、 現在は 退職し 昭和 教職から 31 年 静 中学 岡 静 離 市 れ 校 生

ている。

了され、「完全に退職した中で、 作るのも初めてだった。 封されていたこと。 う言葉と共に秋の吟行予定の案内 いただくことにした」と令和5年 的に吟行に参加し、 紙に、「趣味は多い の大先輩であった曽根満同 万象」への入会に至った。 俳句を始め 初めて満点会吟行に 8 面白そうだと思い たきっ 早速、 俳句の楽しさに魅 方が楽し か It その後も積 参加 は 人から 参加させて 令和4年10 同 Ľ とい -2月 句を が の手 極 [17]

> るものだ。 の明るいおおらかな性格も 冬 写生の基本を着実に守り、 薬 ル 投句 ッコラ買 紅 師 葉ひ 0) 句 眼 とつ散 下に 、ふ小春日 望 1) たる 和 0 垣間見られ 枯 傘 博子さん 郵 0 便 花 上局

4句入選。 そして、 半年 後 0 令 和 5 年 11 月号 0

が出 ところまで観察し 汗染むる 透 如 水 どの句も情景が浮かび、より 来像 草 ている。 . О る目に金 伏 咲 L き通 < 目 0 る 池 色の 翅う 熱心な勉強 先 書 の すみ 蓮 九 風 華 かか بخ 渡 細 0 成果 かい な 1) な る

が内 6年3月号で 春とは言え周りの木木はまだ枯 春寒 その後も佳 にあり、 海名誉主宰より、 や魚板 寒寒とした感じが は 句 0) に 腹 何 度 0 か ささく 選 何に選ば ば n 「ささく れ れ、 れの 令 7 和

加

した、 ようになりたい。 りの句になりがち、 たいと具体的である 課題山積。 取り合わせの句をまとめられないなど い場面を切り 生え初むる〉のように、 村汀女〈ゆで玉子むけばかがやく れ』に出 今後の目標をお聞きしたところ 太 立て掛くる杁を撫 風 号では 和6 中村草田男 郎とぞ蠅 死 詩としての俳句を模索してい す 年 ている」と選評をいただいた。 8月 今後も、 次の4句で巻頭 や二百余 紡 取 b, ぎ に再び4 虎に名づけ 〈萬緑の中や吾子の 今はまだ、 7 季語の本意を生か 引き算ができない 詩的に表現 づる青田 段 日常の 句 瓜 入選の後、 の に輝いた。 独りよが 男 た 何気な できる る 風 歯 花 中

ちの 読書、 ていくことを期 れらを目的とした旅行、 がわり、 美術鑑賞、 博子さん。これらの ピラティスと多彩な趣味 さらに感性豊かな句を作ら 観劇、 待してい 神社 かな句を作られ の一つに俳句が をお持 る。 \$ 14 閣巡り、 のづくり、

小川 明



邯

江見悦子・内海良太 共選

0 O引つかかる物置の鍵野分 勝 秋 薪 番 シャトルバス浴衣の子らを詰め込みぬ 井戸水の熱りのさめて夏 力 犬 風 運 ゃ 眼 ぶ 士 の一匹増 の 家 人 髷 の 紋 般 せは の 若 紺 透 の ひ ゆる盆 **〈** 直 面 しき大 す指 る 秋 釣 の の寺 文 灯 ح 涼 あ の 月 字 籠 那珂川 Æ 京 由久美子

〇ゆく夏の草に紛るる浮標一 **ロ研ぎ終へしゾーリンゲンや鯖おろす** 万葉の海平 はじめての波を足裏に稚 兄弟の 鄲や夢で逢ふ人みな若 涼み会話のいらぬ老夫 校の渡り廊下や晩夏 舟 に男 仲良き頃のソーダ水 一人の かにヨットの 白 H の 夏 婦 傘 Ż 帆 선 珠 東 浜 洲 京 星 井 松 端 井 久 宣

子

夫

日にきらり処暑の砂場のガラス玉 光 野 信 子

廃

釣

干涸びし仰臥の蟬に朝日差す

O餌となる蟬生るるを待つ鴉

髙山ひさ子

- 46 -

伊奈の名は永遠に芳し秋の薔薇	〇蝦夷富士の影映す川下り鮎	爽やかな挨拶受くる散歩かな 佐々	一瞬の静寂や蟬の声途切れ	朝まだき老鴦しきり山の家	夏雲の間の空の青さかな 雁部	連発の花火の音のさんざめく	日日通る薔薇のアーチの分つ道	夜は寝ねず朝寝の猫や半夏生 雁部	八日目の蟬の骸や石畳	人影のまばら残暑の遊歩道	大夕焼白壁に染む港町≒≒石田	秋高し思はぬ方へ輪投げの輪	書き慣れし筆を洗ひて白露かな	うすうすと色付き初むる万年青の実	〇折 山の 枯色となる 秋扇 栃木飯塚	秋日照棚より消ゆる米袋	霊園の芝の広きを飛蝗とぶ	墓洗ふ夫の背亡父の背に似て	O享年はゼロ歳墓参のビスケット fi 村田
		木茂			叩真子			叩真			睦				ザキ ミ				田由美子
遥かより台風近づき寝苦しく	さはさはと藻岩山へ続く花野かな	草原を蝦夷栗鼠はぬる水引草	栗の木に秋風散歩の道すがら	ほうず山より豊平川の遠花火	• 0児の拾ふ橡の実に空映りけり	病棟へ桂並木の薄もみぢ	草の葉と一つコップに赤まんま	- 螽蟖コロナの街の闇の底	夕月を追うて海沿ひひとり旅	新涼や吹奏楽の「ヤングマン」	どうしても車道が好きな石叩	秋風鈴ひとつふたつと順に鳴る	かはせみの青を残して日の暮るる	秋髙し雲を脱ぎたる青き空	虫集く厨の窓を開け放つ	浜焼の秋刀魚のをどる網の上	新涼や図書室の窓開け放ち	カフェで聴く「明星の歌」賢治の忌	秋の暮泣き顔絵文字一つ来る n㎏
	土門			土門			谷			田邊			竹重			園田			島崎
	_			一 平			廣司			政代			富子			鶴 子			洋

		朝日受け稲穂の垂るる通学路草防くシートをくくる藪枯らし	佐藤幸示	妻遺す竹風鈴や書斎の窓の露天湯の両手に擁ま十六夜
渡辺	鹿	合の花はな		中華屋の古びしメニュー秋闌く
		畔刈つて稲刈る用意はじまれり	齋藤 信	福耳の母の寝息や今日の月
		稔り田に湧きては沈む雀どち		夕野分海よりの風がうがうと
福武		優勝はどぢやう掬ひよ地蔵盆		小波立つ二百十日の船溜り
		コンバイン田に入れられぬ秋出水	新 冯 榊原キヨ子	終便へ急ぐ道筋今日の月
		幸水と洋梨持ちて食べ比べ		葛の雨杭一本の悲恋塚
稲川	芳賀	新米を父に供ふる娘かな		〇迂回路の朱の矢印や蚯蚓鳴く
		木道を通行止めに葭を刈る	仙台 富田洋子	ビル街の一樹にすだく法師蟬:
		烈日に渇く大地も厄日かな		O星涼し歩幅合せて温泉街
渡辺	燕	〇昆布じめの紐を解きをり盂蘭盆会		合歓の花山の斜面の捨て畑
		山粧ふ冷めゆく峰の朱を深め	大江 安藤桂花	蜩のシャッター音に飛びたてり、
		秋あかねふんはり里田おしみける		打水や湯煙上る庭の石
山田		干潟飛び水の匂ひへあめんぽう		O首振りをたまに休ませ扇風機
		両の手にそつと包める茄子の牛	新 庄 曾野部礼子	参道に蟬時雨降る羽黒山
		花氷フラワーシャワーチャペルより		十五夜のうさぎ探した幼き日
本間	新泅	老犬の一歩の重し夏の月		野分の夜寝付けぬままに朝日射す
		けら鳴くや往時を想ふ一人の夜	札兒 船橋明美	転んでも笑顔はじける運動会
		るりとかげ厨の壁をするすると		秋薔薇の香り豊かや風の間

杉田富美代		桃の実や剝けば側から手が伸びて		空曇り控へめとなる蟬の声
		喧騒はやがて静かに村祭	** 汐見克彦	海わたり行方さだめぬ野分かな
		酷暑にも予定崩さぬ八十路かな		猪の四股踏張れり旧谷中
有泉正夫		眼底に微かに響く遠花火		傘立に置土産なり捕虫網
		秋の浜サンダルの手に夕日影	義本美智江	太閤忌高石垣に風渡る
		古典覗く晩学楽し秋の蝶		炎めく鶏頭満つるプランター
新谷八郎	佐倉	峰雲や原発止めし活断層		〇ゴーシュ弾くセロの虎狩り秋の雷
		樋橋の放水ゆたか白芙蓉	蘒原美穗子	夏蛙池ぴよんぴよんと我が物顔
		潮風や阿檀の根元に蟬生れ		流星群祈り届かぬ速さかな
小林あけみ	酒々井	〇氷菓掬ふ母の話の途切れなく		国府跡鐙瓦へ秋日さす
		捨案山子目ぢからのまだ残りをり	仲山さよ子	神木の二つに分れ秋天へ
		話さねど顔馴染なり鯊日和		虫の声聞きつつ眠るひと夜かな
高田みや子	千 葉	通学路見守り隊の九月来る		農道に咲く女郎花摘み帰る
		リハビリの妻と一緒に夏の旅	齋藤ミチ子	稔り田を見渡し農夫佇めり
		秋暑し飛驒牛を焼く陣屋跡		絵手紙の壁一面や秋日和
小橋川和子	所沢	竿灯の重さにたへて羽後魂		薬草の香の湯に浸る熱帯夜
		漸くに風の優しき秋の暮	佐野木村君子	梨供ふ右肩の治癒祈りつつ
		コンクリの壁に張りつく秋の蟬		O七七日亡夫と過す虫の夜
森山洋之助	志 木	〇コンビニにジョガー飛込む残暑かな		五七日百日草の掌にあふれ
		土手道を狭めてつづく荻の壁	唯沼 渡辺利子	蔓草を取り払ひたる木槿垣

		芒原羊のごとき雲走る		団地にも時の疲労やさるすべり
奥澤よし江	市 川	かなかなや峡残光の母の里		夏終り車椅子から松葉杖
		コンサート果てし余韻や街晩夏	船橋山口秀吉	ありがたや放置の庭は虫の宿
		仮小屋に幽霊出づる夏芝居		秋日和息子と共に散歩せり
渡部洋子		葉桜の闇に隠るる仁王門		薔薇園の香り楽しむ吾子と我
		宴会の庭かすめゆく今日の月	千葉 近藤澄子	新盆の夫に花をとどけたる
		白樺の樹皮に絵を描く夏休み		白木槿昭和の路地の匂ひして
中森ひろえ		秋の朝踏めばしつとり苔沈む		さやけしや鈴の余韻の写経の間
		梓湖の青き連秋の空	米田敏子	ゴムプール飽きてみんみん真似てる児
		クーラーに冷えて漫ろの日比谷歩き		秋祭果て村ぢゆうの静かなり
寿多映子		台風の眼に覗かれて投函す		我が山の裾を覆へる葛の花
		夜濯や白く小さな物ばかり	立原千代子	稲刈や雲の流れを見定めて
		みそはぎや畑の隅の土乾く		祈ること多いこの月蟬時雨
菊岡緋路		早朝の太極拳やきりぎりす		0 知らぬ児に裾つかまるる夜店かな
		ふと想ふ割烹着の母無月かな	鈴木美根子	大西日枠をはみ出す受領印
		〇一斉に駆け出す園児いわし雲		今年また青空眩し原爆忌
石川幸子	松戸	秋暑しベンチ真白に塗られたる		通し土間盆の灯ゆると流れ来る
		通院の夫に差し掛け秋日傘	佐台 鈴木隆久	〇揚羽羽化翔び立つまでを風が待つ
		秋暑し遅れ遅れの路線バス		亡き母の好きなあんみつ供へけり
鹿毛满子	柏	ロータリー笛にせかるる日の盛		青蔦に覆はれ杉の幹太き

戸締りの手を止め暫し月見かなアラスカの鮭がメインや今日の卓端 渓 の 硯 洗 ひ て 千 字 本紫 の 花 野 の 上 の 白 き 雲	重にてことのして 休白芙差しうけ庭の大株白芙元を過ぐる真水や終戦 興揺れ猫鳳凰を睨みつ	打水の跳ねて一滴首伝ふのいぐべいと帰省の友と赤提灯秋日傘くるりくるりと下校の子終戦日半旗掲げし家一戸	鷺 草の 風に 応へ て 翔ぶ 容朝顔市売り子の声のよく響く地獄なる戸外の工事酷暑の日甘酒と笑ひを置いて友帰る	夕の風六時を告ぐる鐘涼し〇大 雨 や 百 一 年 目 の 震 災 忌地震警報人心地なき九月かな xsふりむけば野のひと叢の吾亦紅
中 鶴	高	齊	北 大	安藤美酒々
澤 田	野	藤	口 場	
桃 智	翠	孝	富 八	
子 美	子	夫	栄 朗	
油 照 獣 の 艶 の 潜 水 艦台風一過歓声満つる競技場みずすまし水の硬さに滑り出す 異朝 まだ き 欅並木に 秋の風	こいかの文でした。これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、	新涼や瀬音の絶えぬ祖谷の里烏賊焼の香り芳し花火の夜夏雲のま白や吾子の華燭の典結 婚 式 賛 美 歌 響く 夏の森	着陸機ドアを開くれば首都残暑夏旺ん無冠の選手帰国せる露払ひ土俵の胸に汗垂るる夕空にわきたるごとく秋燕	幻 の 酒 を 供 へ て 月 祀 る名を知らぬ花ばかりなり大花野 *秋雲を背負ふがごとき武甲山竹林 の 森 閑 と して 秋 の 雨
^布	宫	松 前	平	京 馬場美智子
荒	﨑	本 川	子	
井	正	幸	甲	
仁	義	男 昇	奈	

音に目覚めし朝涼新た 岡元枝 地名 一般	日葵は丈高くあれ高くあれ 横浜 大駒泰子 べ茂る元スーパーの売り物件 昼元のつかまりどころ探しをり サーチ 高草や残るポストの厳しき ## 横井一美 高	下駄履いて村の出で湯へ稲の花 新月夜野てふ名の消えし町星月夜 広い 本 の 道 の 果 て ま で 鰯 雲 Bg 松 原 悦 子 「憂朝 露 や 草 の 葉 先 の 青 白 く タ栃の実の道にごろごろ足迷ふ 老	多摩川は恐竜のごと台風禍wゅ竹村晃子 庭地蔵盆僧侶の仕事手伝ふ子 ○短いまはりの手前に色づくブルーベリー 朝切とまでおしろいの道続く 異等中ノあさ子 霧	波踊腹にひびける太鼓の音 ○芝り居や祭の声ののぼり来る 雲
の峰ダム放流の飛沫浴ぶ震の村瓦礫と化して夜半の月体 の 土の 臭ひ や 秋 の風杯の水を供ふる残暑かな	ルベデーレ宮殿を出て青芝へ寝覚地震にゆらゆら高層階ングラス婦人警官視線消す階よりビルの谷間の揚花火	新紙幣使ふに惜しき西瓜かな広島忌あの日のやうに蟬の声憂きこともすべて忘れて夕端居夕さりて四方の明るき月見草老の身を優しく受くる寝茣蓙かな	の奥まで十薬の道深き夜の寝つきの早き仏間かなぐもり出張の妻中国へ深き平家の里の谷険し	神明香り立ちたる新生姜白し早稲の香れる谷戸の道
茅 ヶ 崎 崎				横 浜
為 横	豊	森 長	柴	坂
保田富士子		野	田	本

骨董の売り買ひの声夜店かな雲海に北岳の峰突き出せり新涼や湖にこだます風の声の雷神の怒髪に刺る残暑かな	び蔓さはさはさはと秋に戦 日 幼 二 人 の 七 な雲やクレーンアーム空を	草 草 に 白 き 露 置 く 朝 か なとんぼうの蔵の梲をつつきをり #岡〇秋立つや子犬の鼻の乾きをる	はらからは四人となりてつくつくし一夜過ぎ遠く黄ばめる処暑の山 ㎏mの凄 じき 雨 後 の 水 音 稲 の 花肌掛けを足元に置く夜の秋	笹の葉の青き香りや二つ星百日草咲いて賑ふ休耕田わが家への坂道険し汗の玉	日の王葉先に光るポトスかなそやかな猫の鳴き声月の庭
海 野 俊 彦	伊 東 文 恵	飯 田 優 子	古谷悠紀子	山本カッツ子	₹
正座して終戦の日の鐘を聞く法師蟬鳴き始めたり宮の杜紙漉きの水場を覗く鬼やんま薫 風 や 餌 に 群 る 鯉 の 口	焼や独りで浸る露天丁の触るるや西瓜真つ暇明赤銅色の子の	の声背山より響きた棚に友の楷書の日記か伏の草に雨降る長崎	買物の背中を襲ふ大西日富士映る湖を巡れり法師蟬天 髙 し 寿 の 鐘 響 か せ よ犀星の苔むす庭に秋の蟬	軽 ト ラの 来る 杣 道 秋 茜秋茜朝日に翅のきらめきて冬瓜の蔓 這ふ畑に翁立ち	終了さの:リューコースの朝霧や宗祇の句碑の大和文字残 響 の 五 臟 震 す 村 花 火 #
内藤允昭	地 裕	中 秀	髙 髙 橋 井 一 明 夫 子	杉 山 巳 代	杉田義則

		青紫蘇を摘む手に重ね香を重ね	4 = 鈴木美由紀	〇法師蟬雨打つ軒に爪を立て #
		稲の花吹き渡る田の白白と		秋薔薇錆をおびたる終の色
田上ナッ子		みんみんの突如鳴きだす朝の庭		ジャグリング玉を放ちて鵙高音
		銀漢や森の奥へとけもの道	2	白提灯戸毎に点す浦祭焼
		星月夜窓辺に満つるノクターン		露草や古き校舎を訪ねをる
菅原雅子		秋蝶の翅の模様の裏表		対岸の文殊観音カンナ咲く
		秋の雲ひとつは縦に機影ゆく	矢野喜久江	赤とんぼ白杖の妻バスを待つ
		どう説きて群を連れ来し稲雀		Oマリアめく石筍ひとつ水の秋
新出祐子		秋山へ遠ざかりゆく窓の鳥		風神の背負ふ袋にいぼむしり
		秋彼岸そなへし品を持ち帰り	松永博子	秋光に木肌の脂の琥珀色
		秋桜揺れ友の顔揺れゐたり		終戦日錆濃き戦車展示され
北野陽子		虫時雨亡き叔母を呼ぶキーちやんと		沢音に包まれ臭木咲きにけり
		夏場所や郷土力士の復帰戦	長谷川洋子	新涼や深山へ続く杉木立
		缶ビール片手に弾む話かな		初の梨夫の遺影にまず捧げ
上野富貴子	金 沢	熱帯夜車中泊りのボランティア		秋の蝶嫗二人に加れり
		大皿の塩に塗るる鮎を喰ふ	野﨑浩子	白粉花空き家の庭を埋めつくす
		杣道は山の神へと鬼やんま		土手走る男女の足に猫じやらし
鈴木裕一	川根本町	日輪の赤色強き原爆忌		虫の音をロードバイクが消し去りぬ
		フルートの窓辺にうたふ涼新た	"岡永田公香	シンバルの屋根打つごとく秋の雷 #
		本堂の句座に舞ひたる鬼やんま		小手に刺す点滴の針蟬時雨

山肌に雲くづれたり蓼の花	〇広重の絵を観て宿のとろろ汁 ww 川〇蓑虫の 一本の 糸山 暮るる	伐採の原木の香や	もみ洗ふ絣の野良着終戦日 鶴	旬日の台風災禍其処此処に	金秋の朝一の報金メダル	風の盆町流しの腰しなやかに 貞貞 朝	梅雨出水軒に土嚢を高く積み	海開き雨の浜辺となりにけり	早朝の庭の紫陽花仏花とす カサーヘ 能	塀越しの脚立に法被松手入	秋籐かくれん坊の声ひびき	有磯海義経岩に驟雨くる 宮	兼六園舟を浮べて松手入	夜通しの雨止みて街蟬の声	水やりの放物線の涼新た 松	睡蓮をゆらし水汲む長柄杓	玫瑰の実の赤赤と反戦句碑	今日の空雲ひとつなく梅雨明くる 並沢 廣
	口和代		尾正江			有のゆき			化任康子			口崎惠美			田好子			田宏美
雨を得てかんかん照りの夏終る #	へ ざわざわと風跳ね返す夾竹桃水見舞がははと叔父の返事がな	す八幡様の茅の輪か	井戸水を運びて父祖の墓洗ふ	「地震来る」と米売り切れる敗戦忌	土佐弁の兄弟げんか帰省して 〃	a 蒼天へ飛び立つ鳩やヒロシマ忌	そこかしこ蟬のむくろや天守跡	しばらくは厨に聴けり虫時雨	ェータ焼空高校野球見つづけて	おしぼりを頭にのせて盆の僧	テレビの音消したる夜の虫時雨	天 ウェディングチャペルに舞へり夏の蝶	0踊子の踊り疲れし下駄の音	打球音響く闘志や夏の空®	₩ ○京都駅宵闇深きゼロ番線	名刹の芭蕉林より人ぬつと	世俗捨つる放哉の句碑酔芙蓉 タ	ヌ 処暑の風家紋の袱紗ととのへり
岡		山			小松島									岛			贺	
園田		入 河			田上			山本			山 本			林			為永	
清		נייו			幸			瑤			晴			早			永香月枝	
子		大			子			子			美			苗			枝	

万象作品の佳句 エ見悦子

d de la company de la company

場か、などと想像がふくらむ。豪快でたくましい男の世界だ。っちりとしたアウトドア用のナイフである。場所は港の洗い釣って来たばかりの鯖をおろしているというのだ。愛用のがこの句、自身で研いだ切れ味抜群のゾーリンゲンのナイフで、名。旅のお土産に鸛の手芸鋏を貰った時の嬉しさを思い出す。「ゾーリンゲン」は、刃物の製造で世界的に有名な都市の「ゾーリンゲン」は、刃物の製造で世界的に有名な都市の

災害に襲われた街や港や山里で、多くの命が失われた。鎮魂つけた作者。普段は海に浮かんでいる筈の浮標である。激甚何回聞いたことか。夏の終り、生い茂った草の中に浮標を見この秋の洪水被害もあり、今年は能登半島の珠洲の地名をゆく 夏の 草に 紛るる 浮標 一つ ・珠 洲 井 端 久 子

の思いの深い句

今年は台風が多く、特に九州地方に水の被害が多かった。引つかかる物置の鍵野分あと 翌三 高山ひさ子に見つめている作者の目。緊張感あふれる一句となった。自然界の摂理とは言え、むごい場面である。翅を十分には餌となる蟬生るるを待つ鴉 横浜 星野信子

作者。気持ちの良い句だ。む前、崩れた髷を結い直している床山の指に涼しさを感じた銀杏の髷」を結えず、丁髷姿で賜杯を手にした。表彰式に臨記憶に新しい。彼はまだ髪が伸びず、関取の象徴である「大

九月の大相撲秋場所が関脇・大の里の優勝に沸いたことは

の句であるが気にならない。淡淡と眼前のモノに語らせてい親の気持ちが切ない。中七の途中で切れ、句またがりの破調たずに亡くなってしまった赤ちゃんに、ビスケットを供える「享年零歳」と彫られた墓石の前のビスケット。一歳を待享年はゼロ歳墓参のビスケット 柏 村田由美子

る即物具象の句。

た。役目を終えた秋扇に感じた哀感を「枯色」と表現した。ていたのだ。ふっと見て取った変化を、すかさず句に仕立てていることに気づいた。使い始めの白色が薄茶の色に変わっ猛暑の続いたこの夏、使い馴らした扇の折山が枯色になっ折 山 の 枯 色 と な る 秋 扇 栃木 飯塚キミ

「万象」句会一覧 ① (2024年12月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指導	幹	事
1	万象·新中央	第4日・1時(変更あり)	東京文化会館	良太・悦子 文代・千久	久留島・南雲 小池	080-1297-6113
2	札幌	第1土・1時	道民活動センター	林 陽子	落合裕子	080-6098-3822
3	札幌北	第1水・12時半	篠路コミュニティーセンター	岡本敬子	中鉢弘一	011-598-6571
4	札幌北(吟行)	第 3 水	吟行地	岡本敬子	中鉢弘一	011-598-6571
5	札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子	011-707-2259
6	札幌円山	第2火・6時	円山商店	濱谷和代	北浦詩子	090-9085-4391
7	新 潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	髙橋ひろ	高野松風	070-2828-7962
8	河 交	第 3 日·1 時	新潟中地区公民館	高野松風	佐藤幸示	025-268-3232
9	佐野・みかも	第 4 火·1 時	佐野城山記念館	亀田・加藤	阿部・義本	0283-23-0747
10	風車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子	0283-25-2155
11	别	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	茂木弘子	090-4456-2204
12	新 樹	第1金·1時半	佐野城山記念館	增田幸子	上岡佳子	0282-62-5138
13	皐 月	第1月・1時半	城北地区公民館	増田幸子	売野 緑	0283-25-2109
14	すずかけ	第3土・1時	佐野城山記念館	増田幸子	店網洋子	0283-23-5587
15	佐野合同吟行	毎 月 25 日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子	0283-25-2155
16	二 荒	第1木·1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	阿久津勝利	028-662-8020
17	芳 賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	勝利・かし子	福武幸子	028-678-0175
18	志木木犀	第 2 日·1 時	志木ニュータウン東弐集会所	中村千久	板垣陽子	048-465-7217
19	浦 和	第 3 日·1 時	大妻女子大学	中村千久	砂地宏子	0422-47-3402
20	千 葉	第 2 土・1 時	船橋市勤労市民センター	良太・とく江 たけし	塗木翠雲	090-5753-9873
21	つばき	第1日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子	047-462-3711
22	小金原	第2 第4 金·1 時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	榎本 亮	047-344-2772
23	成 田	第1日·1時半	都賀コミュニティーセンター	良太·佐奈枝 太雅	塗木翠雲	090-5753-9873
24	うすゐ	第 3 月 · 1 時	臼井ニッコー会館	内海良太	横川良子	043-487-2625

「万象」句会一覧② (2024年12月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指導	幹	事
25	都 賀	第2日・1時半	都賀コミュニティーセンター	内海良太	高田みや子	090-7011-6144
26	柏	第 3 土・1 時	アミュゼ柏	とく江・郁代	内田郁代	047-163-6810
27	柏吟行	隔月曜日不定	吟行地	とく江・郁代	当番制	
28	東京俳句スクール	第 2 火·1 時	高井戸地域区民センター	江見悦子	吉中・藤田	044-986-1667
29	成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	下嶽孝一	下嶽孝一	090-3540-7471
30	本郷 (通信)	月 1 回		山本右近	桔梗 純	042-726-0174
31	杜の会	第1水・1時	文京区男女平等センター	赤堀・南雲	南雲秀子	042-946-5536
32	小松川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	長谷川・前川	03-3685-8754
33	横浜	第2日・1時	かながわしプラザ	小林爱子	大久保進	044-333-1054
34	横浜洪福寺	第3金・正午	ほどがや地区センター	小林爱子	榎本文代	045-953-4246
35	保土ヶ谷	第2木・正午	西谷地区センター	小林爱子	星野信子	080-6505-0666
36	あさひ	第4火·正午	上白根コミュニティーセンター	榎本文代	後藤晴子	045-954-1519
37	金沢文庫	第 3 日·1 時	谷津坂会館	大橋雅子	加藤和子	045-773-6961
38	戸塚品濃	第 2 月 · 1 時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾	0467-32-6578
39	ミモザ	第1木·10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代	045-953-4246
40	川崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤・新妻	新妻奎子	044-573-9249
41	伊勢原	第 4 水·10 時	中央公民館	吉中·佐藤和	佐藤和子	0463-93-3979
42	静岡青葉	第1日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	吉野美智子	054-281-9827
43	静岡 葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	获野加壽子	石川裕子	054-282-8577
44	静岡大里	第1水·1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子	054-286-3719
45	静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭	054-282-1063
46	小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美	矢野喜久江	054-283-5216
47	登呂通信	月 1 回	(投句・通信)	曽根 満	本多ひとみ	054-335-5107
48	風の谷	第2金·1時半	北部生涯学習センター	曽根 満	伊藤文恵	080-4172-5194

「万象」句会一覧 ③ (2024年12月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指導	幹	事
49	小 春	第3土・18時半	来・て・こ	曾根 満	曽根 満	054-286-5078
50	静岡放送俳句講座	最終土・10時	SBS 学院	曽根 満	小川明美	054-283-6233
51	井川お茶壺	第 4 金·3 時	井川生涯学習交流館	曽根 満	鈴木裕一	054-756-0601
52	井川山法師	第 4 金·3 時	井川生涯学習交流館	大村峰子	筑地裕子	054-260-2047
53	井川 聖	第 4 土 · 7 時	南アルプス井川観光会館	海野みち子	宮崎知恵美	054-260-2355
54	満点会吟行	随時	吟行地	曽根 満	小川明美	054-283-6233
55	時雨窓	第3水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	杉田義則	054-261-2245
56	富士花野	最終金・9 時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌司	0545-63-5697
57	富士吟行	随 時	吟行地	神田美穂子	当番制	0545-78-0591
58	赤ペン	第1土・1時半	遊亀庵	获野加壽子	获野加壽子	054-262-2486
59	堅香子(通信)	毎 月 15 日		神田美穂子	藤本節子	054-282-7970
60	あかね	第1木·1時	四高記念館	井村・谷渡	伊藤・豊田	076-239-2103
61	白 菊	第 4 水·1 時	西光寺	中條睦子	伊藤美音子	076-239-2103
62	蘭	第3水・1時	泉野図書館	井村和子	豊田高子	076-252-2028
63	ふれあい	第1 第3 水·1時半	コミュニティーセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝	0767-68-2187
64	敦 賀	第2金・1時	北公民館	鶴田勝子 中村 優	中川雅月	090-2038-2444
65	まつかぜ	第4火・1時	北公民館	中村 優 靍田勝子	中川雅月	090-2038-2444
66	徳 島	第 4 土・2 時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美	086-625-1500
67	芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小林爱子 (後日選)	宮田千恵子	092-861-4605
68	長崎鳴滝	第 3 日·1 時	鳴滝西部公民館	丸本祥夫	永田美知子	095-822-8624
69	宮崎ひむか	第1土・11時	ホテルマリックスラグーン	中山宜・芳教	鳥居達史	090-9406-8807
70	真南風	第1土・3時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086
71	ふう	第4木・7時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086

^{*}記載事項に変更のあった場合は、総務の久留島 (080-1297-6113) までご連絡ください。 次回は5月号に掲載します。

万象この一年

多くの により、 により 20名を超える方方が「 震により年が明けた。 僚誌 「万象」 6年は、元日 5月号をもって終刊となった。 また、僚誌「 風港」は発行 (港」は発行が困難となり、31同人・会員の方方が被災され 夕方の能 万象」に転籍された。 この地震により、 りいの」は、檜山 登半島北部を震源域とする巨 僚誌の終刊に伴 3月号をもって終 石川・富山 哲彦主宰の逝去 地震 の影響 在住 な

大会・事業

様全国俳句大会に先立って開催された。 で開催され、約100名が参加した。同人会総会は、昨年同間)のみであった。昨年4年ぶりに開催された「万象」全国間)のみであった。昨年4年ぶりに開催された「万象」全国

万多」誌

誉主宰による まった。俳人協会発行の「俳句カレンダー」への掲 江. 」を連続掲載。「特別作品評」は3月号まで岩﨑 曽根 1月号から編集部による「続・風のしをり」の 見悦子主宰による 見悦子主宰による「同人作品の佳句」、 満、江見悦子、 「万象作品の佳句」を連続掲載。 「万象の窓」は12月号で33回とな る「同人作品の佳句」、内海良太名中村千久、髙橋ひろの4氏が寄稿 新 掲載句自註 中央句会 4

> 選句鑑賞 9月末現在6名が登録済み。前年度から連載の 会結果報告は、 巻末に「ルビーの小函」を掲載し、本誌作品中にある難読語 中心の自由投稿の場で地域性と個性豊かな内容となっている。 ンやタブレットでも参加できることから、 会長ほか同人会役員による報告。「万象」オンライン を学べる場を提供した。「同人会だより」は曽根 いく」は中村千久編集長が継続担当し、遊びながら俳 万号からて 本 の訓みを紹介し、主として初心会員の勉強の場とした。 が担当し、 は12月号をもって最終回。「万象ノオト」は会員 孝一が担当。「 同事務局・沢辺たけしが担当。スマー 本企画はこれをもって終了。 同人作品鑑賞」は、 参加 者を募 「江見悦子自 珈 9月号まで 満同人会 同 句琲 り漸増 トフォ 人 句

1月号 曽根 て 主宰作品「わたしの歳時記 の7句。主宰特別作品は「能登しぐれ」、〈能登しぐれ地の ゆきましょう。小林愛子名誉顧問は「風音集Ⅰ」に の色紙。江見悦子主宰の 載記事)。「同人会だより」令和6年を迎えて つやつやと純子句碑〉(前書に中山純子先生の句碑を訪ね 「気宇壮大に志を高く」、おおらかに楽しく、元気に進んで の色紙と年頭の挨拶。 新春特別作品は、故小板橋泰山 内海良太名誉主宰の〈初景色常陸平野に山ひとつ〉 〈アネモネはマティスの赤や初 キーワードは、 草の露」 氏の「木曾の秋 (『俳句四 昨年に引き続き 同人会会長 季』より転 露 15句。

作成について(大久保 進)。

君募集(沢辺たけし)。万象の窓「万象賞」に応募を(江南募集(沢辺たけし)。万象の窓「万象賞」に応募を(江載)。「同人会だより」「万象」オンライン同人句会の参加3月号 『砂時計』鑑賞(俳誌『森』令和5年10月号より転

「江東・年代・一門の大学」(日本は1750年年が10句抄出。「同人会だより」私のお宝(福島せいぎ)。4月号 「万象の窓」能登半島地震の句70余句の中から江見

人会の活動について(柳澤宗正)。福島せいぎ句集『箱廻5月号 「万象の窓」綾子先生と牡丹。「同人会だより」同「古典と遊ぼう」『紫式部日記』(内海良太)。

港」が終刊、沢木氏から続く「風」の灯消える)(2月29南北」に僚誌「風港」終刊の記事転載(珠洲の俳誌「風澤宗正、曽根 満、榎本文代)。「万象」句会一覧。「東西し」鑑賞(江見悦子、内海良太、小林愛子、中村千久、柳人会の活動について(柳澤宗正)。福島せいぎ句集『箱廻

6月号 「万象」組織と業務分担(令和6年4月から)日付 北國新聞)。

せい。
受賞。「同人会だより」札幌句会発足とその歩み(松原智

8月号(第22回「万象一折人賞発表)一由久美子。「司人会ら南から」俳句鑑賞時の五感活用(安藤美酒々・東京)。7月号 「同人会だより」幹事会報告(大久保(進)。「北か

月に当たり「人間コンピューター」(多田英治)(俳誌『百だより」こぶし窯の思い出(亀田やす子)。故山田春生忌8月号 第22回「万象」新人賞発表 一由久美子。「同人会

「北から南から」さっぽろ文庫「札幌歳時記」(濵谷和代・9月号 「同人会だより」食べて学んだ風木舎 (吉中愛子)。

花』より転載)。

札幌)。

子、内海良太、井村和子、中條睦子ほか)。「北から南か澤、修「鳥」。「中山純子忌に寄せて~没後十年」(江見悦次点/伊藤文恵「茶摘」、佳作/松田好子「辺戸の桜」、杉回「万象」俳句賞発表 正賞/伊藤美音子「空の不思議」、10月号 「同人会だより」第七回中山純子記念賞募集。第22

に合冊。 (成瀬真紀子)。「令和6年度全国俳句大会作品集」を巻末(成瀬真紀子)。「等9回いわき海の俳句全国大会(報告)」 留美子・栃木)。「第9回いわき海の俳句全国大会(報告)」 人発表。「北から南から」八海山の火渡り式(髙橋ひろ・人発表。「北から南から」八海山の火渡り式(髙橋ひろ・1月号 「同人会だより」第七回中山純子記念賞募集。新同1月号 「局体の七四町(丸本祥夫・長崎)。

徳島)。「句会一覧」を掲載。「万象この一年」を掲載。ら南から」徳島城址公園(城山)について」(平岡 功・12月号 「同人会だより」第七回中山純子記念賞募集。「北か

句集・出版物

令和6年5月 倉谷紫龍第一句集 【群青の湖】 (若越印刷)

受 當

末枝が受賞。 第6回中山純子記念俳句賞は28編の中から村上和義、 佳作は髙橋ひろ、 特別賞には髙橋ひろ、今越み 谷渡

が受賞。次点は伊藤文恵、 第22回「万象」新人賞は一由久美子(東京)が受賞。 第22回「万象」俳句賞は、 佳作は松田好子、 40編の応募の中から伊藤美音子 杉澤 修

> 作品21句 巻頭作品50句

伊藤伊那男

石田

郷

https://www.kadokawa.co.jp/

軽舟

(東京)、 (福岡)、 為ながか 香味 一人 大きない かん かくがい かい かい あい あいるし

んでご冥福をお祈り致します。

(令和5年11月5日 (令和5年11月9日 佐野) 沖縄) 88歳 81 歳

(令和6年3月30日 6年1月6日 横浜) 茅ヶ崎) 70 歳 1 Ô

歳

第70回

受貨後 第一作角川俳句賞

21 句

若杉朋哉

角川文化振興財団

星野高士×

金

田

秀穂

対談

日本語の美学

(令和

(令和6年8月19日 月16日 金沢) 静岡) 81 歳 95 歳

句集特集

日本の俳人の

広渡敬雄

風紋

※内容は変更になる場合があります。

(令和6年4

物故同人 (神奈川 (福井)、

人物特集

(北海道)、

はじめての田中裕明20句/ディープな裕明20句 各拾遺/「夜の形式」を読む/なぜ田中裕明か 「山信」「花間一壺」「樱姫譚」「先生から手紙」「夜の客 没後20年 句集未収録作品を読

11月25日発売 予価1,100円(本体1,000円)値

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子由店で購入できます。 株式会社KADOKAWA

茂

(大木

- 63 -

新中央句会報 (9月例会)

令和6年9月22日 (日) 東京文化会館

出席24名

窓より ち口に鯉の集まる よいと手 'n 出て秋 良 夜 の 桔榎一 柳榎中久砂 塗 沢 本 文 文 辺たけ 留 木 池嶽 地 島規 久美 子正代久子子純代子雲 し晴

どうか確かめようとしたのか。想像がふくらむが、 か。この手は何のために出て来たのか、雨が降っているか 白い句だ。文字通りひょいと生まれた眼前 窓よりひよいと手の出て秋の雨 中 の一句ではな それがど

(†)

が降り続くことの多い「秋の雨」の斡旋も良い。 うであれ、具象が抽象に転じる一瞬を言い留めている。 みの古書の頁の秋じめり 小雨

感じられる。触感、嗅覚の生かされた句。 と湿っぽさを感じた。秋の冷え冷えとした湿っぽさに匂いも 本」と採りたい。古本屋で立読み中、頁をめくった時にふっ 古書」には「古い文書」の意味もあるが、ここでは「古

それ以上の言葉はいらない。 米の白と卵の黄の対比も鮮やか。「黄身もり上り」と来れば、 ての新米」に新鮮な卵の取合せの美味しさは格別のもの。白 なったが、ようやく新米が手に入るようになった。「炊きた 猛暑や台風の影響で、売場から米がなくなり一時期話題と

炊きたての新米に黄身もり上り

久留島

規

の行進のイメージかもしれない。秀吉の馬印の千生歞箪も思 と」と詠んだ。沢山の小さな青飄が一列に並ぶ様は、少年兵 千生り」は青瓢の傍題。棚から下る青瓢を「隊列のご千生りの隊列のごと下りたる 一榎 本 文 代 俳味のある一句となった。

村

秋パ妊 7 トリエの歪な玻璃や秋芝居あぐらかきゐる『 オに寝 りの腹をなでゐる良夜 口に鯉の集まる 津 て天穹高く流 主 の 良 馬 В れ か 避 の か 星な 脚 L 砂江杈内下 由 見本田 宏悦文郁 子子代代

+ 赤古湯 眠 いなる月上げ夜のジャング 気 ゃ Ø ち 来 場 宿 て る る迄 し薩 Þ 朝 蟷 の 厨 のことも 摩切子に 郷の けてお 朽ちて大 を 妻を卓に 乗る 向 新 く Ś は 洒 虫 待 花 ゃ 注 の ジ ۲, Ž 野 駄 三砂 下下榎桔 下 嶽 地 嶽 孝 進 俊子一一 代純

大 久保 酒

(粉)

チェンバロのバッハの余韻十三

とに新しく美しい。 クラビーア」といったチェンバロ曲の余韻を重ねている。 じみとした味わいを愛でる。掲句はそこにバッハの『平均律 盤から指を離した後に微かに残る残響。この取り合せがまこ る後の月であ 陰暦: チ ェンバ 九月十三日の月、満月の二日前で左側が少し欠けてい ર્ઢે の 俳句では、「十三夜」と言って、 バッハ の余韻十三 夜 安 籐 その 酒 しみ Ą

出 濃し」というこのアトリエで、画家はどのような作品を生み し込む秋日が乱反射して、どこか重たい感じもする。「秋日 ラスも古く、気泡が混じったような「歪な玻璃」なのだ。 [したのだろうか。 !家の古いアトリエだろう。明り取りの窓に嵌められたガ アトリエの歪な玻 (璃や秋日濃 l 内

ほどによく点が入った。軽い調子の句から、

の日の句会は下嶽さんのためにあった、

と言い

たくなる

掲句のような写

(†)

 \Box

C

0)

ま 送

る ŋ

野辺の 鯉

ちてなほ沖

を

向

<

舟

耍

下

嶽

生の眼 けて打ち捨てられた朽ち舟。水平線に広がる「鰯雲」が見事 な余情を生んだ。 の行き届いたものまでを並べて見せた。 舳先を沖に向

らは幸福感に包まれている。 の支度をしているのである。 し込み、そこにいる作者の妻を包み、細君は影となって夕餉 敢えて切らなかったことで、少し遅れた月明かりが台所に差 掲句が「十六夜や」ならば取らなかっ 十六夜の厨の 妻 を 卓 盃を傾けて妻を待つ亭主、こち に 待 ち た。「十六夜の」と 大 久

本

電卓を打ち野の花をお炊きたてので 葉生姜の 曼珠沙華 芝居 トリエの 卓を打ちつつ叩く蚊 葛原ふくらみ あ ・を益子の 恩直 かをりに盃を重 ぐらかきる ほ沖 新米に黄身も に整 な玻 を 切つて四 工を伸 < ば 月 の り上 H it 名 主 鰯 ij る 砨 ŋ n ŋ 丰 大内久 塗 江 内 久 留島規 田 嶽 見 郁

子

三砂桔 木地梗

ゃ

さし薩摩切

グ子に

酒

の

ŋ

彼 注

夜

厨の 水使

灯やすり足のシテゆるらかに 崖 < 由久美 進子子純進代

うである。 である。 れると、 特 ち口 落 5 0 闇をほのぼのと照らして十五夜の大きな月が現 の姿が影絵のように浮かび上がってくる。 水音に 鯶 鯉が集まっ 0 集 # る てくるの 良 夜 か だろう。 な 大きな池 由 久 美 幻想 0) 子 わ

馬の役。 穫が終わった後に行われている。 くらんでおかしい。 村人に伝承された歌舞伎狂言などを演じる村芝居。 村芝居 なんで胡坐をかいているのだろう。 あ ぐら か き る る 舞台を盛り上げているのは 0 脚 いろいろ想像が 下 嶽 秋の収

上がり こに卵を一つ、 つややかに炊き上がった新米。 炊きたての新米に が新米を引き立てている。 コツンと割って玉子かけごはん。「黄身盛り 黄 身 to り上 茶碗にこんもり盛って、 1) 久 留 島 規 そ

六夜の 卓でウイスキーを飲んでいる夫。 句からは小説 月が窓越しに 夜の 0) 0) 明るい。 ページのように、 妻を卓に 妻は台所。 待 ゆ 5 0 くりと上ってきた十 声を掛けても忙しそ いろいろな物語が生 大久 保 進

今後の新中央句会の予定

まれそうである。

▽12月22日 V 1 月26日 日 日 東京文化会館 東京文化会館 中会議 小会議 字 13 13 時 時 より より

> 受賞記念作品20句 俳句四季新

> > 関灯之介

受賞記念作品20句 俳句四季新人奨励賞

中西亮太

とりあえずの日々 成瀬政博

競詠5句

併壇観測 筑紫磐井

青木亮人 忘れ得ぬ俳人と秀句 坂口昌弘

渡井恵子 大屋達治 坂口緑志

俳人の響き 句の手触り、

俳句へのまなざ 大西 朋

星野 愛

幸今月の華 髙松守信 古賀雪江 遠山陽子 ₩ 巻頭三句

俳句の詩語 イメージ辞典 井上泰至

滕村公洋 てのひらの江戸 古典籍を旅

辰巳泰子 杉山久子 奉 俳句と短歌の10作競詠

俳句のつまみ 毬矢まりえ 一ノ宮一 Haiku Shiki

広渡敬雄

人と作品

井越芳子 相子智恵 全国・俳枕の 渡辺誠 伊藤伊那男 旅 62 郎

諸家書架

選

年

東京四季出版 https://www.tokyoshiki.co.jp/ 〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 **☎**042-399-2180

ルビーの小函 (12月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、 読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。 太字は季 語ですから歳時記で確かめてください。 読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 4 瓢の実(ひょんのみ)
- 7 産土 (うぶすな)売 (へた)
- 8 稲架(はざ)
- 9 其処此処(そこここ)晩稲(おくて)在さぬ(まさぬ)容ねがて(いわがて)
- 13 卯建 (うだつ) 豇豆 (ささげ) 納沙布 (のさっぷ) 閏 (ねや)
- 14 お仏飯 (おぶっぱん)
- 15 斎田 (いつきだ) 花縮砂 (はなしゅくしゃ)
- 16 茨線(ばらせん) 官衙(かんが) 去ぬ燕(いぬつばめ)
- 17 印傳 (いんでん) 岬廻 (みさきみ)
- 18 今際 (いまわ)
- 19 東(ひんがし) 通草(あけび) 末枯(うらがれ)
- 20 仕舞屋(しもたや) 鳴立庵(しぎたつあん)
- 22 鯱 (しゃちほこ) 勢 (きおい) 水団 (すいとん) 零余子飯 (むかごめし)

- 33 新松子 (しんちじり)半玉 (はんぎょく)芋茎干す (ずいきほす)
- 24 海猫帰る(ごめかえる)
 勿来(なこそ)*福島県いわき市の地名
- 25 真面に(まともに)十団子(とおだご)不折(ふせつ)*中村不折 洋画家・書家
- 26 砺波(となみ)*富山県の地名 矮鶏(チャボ)
- 28 矍鑠(かくしゃく)
- 30 肥松 (こえまつ) 焼べる (くべる) 水夫 (かこ)
- 31 饗の神酒(あえのみき)
- 46 平か (たいらか)浮標 (ブイ)熱り (ほてり)般若の面 (はんにゃのおもて)
- 47 折山(おりやま) 螽斯(きりぎりす)
- 49 鐙瓦(あぶみがわら)
- 51 容(かたち) 祖谷(いや)*徳島県の地名
- 52 厳しき (いかめしき)。 紅蜀葵 (こうしょっき)
- 53 梲 (うだつ)群る (むらがる)
- 54 塗るる(まみるる)
- 56 潭 (ふち)

南

北

「くぢら」10月号に 滴りを豊かに筑波山七合目

良太

子名誉顧問の句 内海良太名誉主宰、

消

息 等

江見悦子主宰、

小林愛

「たかんな」10月号・「初蝶」10月号に 伊吹嶺」10月号に 葉桜 沼を出て川を隠 手力男命待つ蚊いぶしの神楽殿 の下葉桜 0) せ 風 1) 湧けり 夏 0 悦子 悦子

歯を磨く肘こまやかに夜の蜘蛛 青梅雨や合羽ガバリと宅配人 愛子 悦子 良太

る江戸時代の花園です。

て(中條睦子さんからのお便りを紹介) 風港 元主宰・中川雅雪氏の近況につい

西

石川県俳文学協会

犀星俳文学賞選考委

員会が十月一日に開催され、選考委員の 子を語られ、お元気な様子に安堵した。 害のお疲れも見せず、 席された。スーツ姿の氏は、震災に次ぐ水 人である中川雅雪氏も、 度重なる被災地の様 被災地珠洲から出

ているかは分からないとのことでした。

海に迫る崖の崩壊が酷く、どのようになっ

曽々木海岸にある沢木欣一の塩田句碑

は

限りなきそらの要や

望の月 七十二

最中堂秋耳 峰庵十湖

切り分けし西瓜の塔に種の窓

雪中庵梅年

うつくしきものは月日ぞ年の花 黄昏や又ひとり行く雪の人

寶屋月彦

仮設住宅にお住まいとのこと。

東

江戸の花園 秋の向島百花園探訪

小池清晴

味でつけられたとされます。 説では「四季百花の乱れ咲く園」という意 中心とした花園として開園されました。 人墨客の協力を得て、花の咲く草木鑑賞を でいた佐原韓塢が、 1804 (1830) iT. 一戸の町人文化が花開いた文化・文政期 交遊のあった江戸の文 骨董商を営ん 唯一現代に残

していた。 十月中頃で、 折々の姿を見せてくれる。 は最も小さいが、今でも様様な植物が四季 それは東京都墨田区の住宅街の一角にあ 東京都の管理する庭園や植物園の中で 萩の花が終わりを迎えようと 私が訪ねたのは

今回は秋冬の句をご紹介する。 何事もかかる浮世か月の雲 水や空あかり持ちあう夜の秋 おりたらん草の錦や花やしき 園のあちこちに俳句を記した立札がある。 柘植黙翁 北元居士

の力」。滑稽俳句協会会長の八木健氏が文 月刊 俳句界」 10月号の特集は 一笑い

章を寄せ、

「思わず笑ってしまう俳句22句

を紹介している。その一部を抜粋する

俳句の「俳」の原義である「滑稽」とは

さをも内包している。 い笑いを超越した、 て痰のつまりし佛かな〉は、単なる可笑し れ」「ふざけ」と訳されるが、哀感や寂し 何か。狭義には「面白可笑しいこと」や「戯 達観した笑いとでも言 子規の句の 〈糸瓜咲

おうか。(一部略 22句から

学問は尻からぬけるほたる哉 春雨や食はれ残りの鴨が鳴く 酒止めようかどの本能と遊ぼうか 永き日や欠伸うつして別れ行く 茗荷よりかしこさうなり茗荷の子 正岡子規 金子兜太 夏目漱石 小林一茶 与謝蕪村

三椏の花三三が九三三が九 アンパンの臍の胡麻とる四月馬鹿 さの行のおしまひはそよ春の風 杖突いて杖つくさくら訪ねけり 荒井 氏家頼一 飛田正勝 稲畑汀子 類

(報・編集部

松尾芭蕉

あら何ともなやきのふは過ぎてふくと汁

(◆この線より切り取ってください)

万象作品 令和七年 四 月

(句の表記は歴史的かなづかいで)(*の枠内には何も沓かないでください)

(一月十五日締切) 都または市・町・ 村名 がふり 号 姓 年齢

k		*	*	*	
] [
			ļ		
·····					
•••••					
•••••	ļ <u>.</u>				.
					.
				<u> </u>	
					.
		-	1	{	

貼ってください 手を

				_	_	
9	3	9	0	3	6	4
ب	ك	لتا	لتا	لتا	ت	لتــا

氏名住所

万象作品投句係 行

射水市南太閤山13 - 24

〈通信欄〉

記

が、

何か物足らぬさみしさがまだ残る。

6年も、12月を迎えました。それぞれ 猛暑の後の気候不順などの影響もあり すは、千久も! と慌てた。この夏の の一年を感慨深く振り返っておられる かな日日を心がけましょう。 いた。ストレスを溜め込まず、心穏や あちこちで体調を崩したという話を聞 曽根満同人会会長の御両所不在。 会も終了したが、内海良太名誉主宰と ▽元旦早早の能登地震に驚いた令和 令和6年度の「万象」全国俳句大 (千久) 一時、

ことでしょう。私自身も同年代の友人 良に戸惑ったり、己の老いを意識せざ が病に倒れたり、思いがけない体調不 った。毎日午後3時になるとバイクの て生きて行きたいものです。 るを得ない昨今ですが、ただ前を向い ▽10月1日から新聞の夕刊が無くな (規子)

> リスマ・キャロル』をつい思い浮かべ てしまう。宮沢賢治の童話には「ほん ▽12月になると、『幸福の王子』 「ク 美穂子

年はこの言葉の意味を考えながら年を ないかわかりません」と言わせる。今 だ。地位も名誉も富も時には科学も人 とうのさいわい」と言う言葉がよく出 人物に「だれがかしこく、だれが賢く を幸せにはしないと。賢治はある登場 てくるが、これらに共通するのは同じ

越そうと考えている。 ▽DIC川村記念美術館へ行った。 (宏子)

案があり、 株主から経済合理性を理由に売却の提 分厚く敷き詰められていた。もちろん 内の5メートル四方の床をキャンバス な美術館がある。私が訪れた時には館 本物である。そんな美術館がDICの に見立て、そこに白い様様な花びらが 手入れの行届いている庭園の中に瀟洒 来年から閉館するという。

会員を募ります

ていただきます。 会員は左記の会費 (誌代)を前納 Ĺ

一年分

郵便振替口座 00230・0・103581 ください。新会員は必ずその旨明記。 会費の納入は左記の振替をご利用 11,000E

₹ 284 1 0015 絡願います。 必ず封書又は葉書にて、 住所変更届・退会届等については、 **塗木翠雲** 四街道市千代田1-7-10 左記へご連

万 象 士 月号

第二十三卷 通卷 第二七三号 第九号

令和六年十二月一日 江 見

宰

編集人 発行人 È

T168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三一-六-603 万 行

まった。10日が過ぎやっと慣れて来た

ある。

(清晴)

ちなみにDICとは旧大日本インキで

ともに届けられていた。1日の夕方、

音がして郵便受けのガタンという音と

今日は夕刊がまだ? とつい思ってし

☎○三-六三二四-五七九六 悦